
君が呼ぶ風

渡瀬 圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君が呼ぶ風

【Nコード】

N2186R

【作者名】

渡瀬 圭

【あらすじ】

八神灯は幼少から身体が弱いことが悩みの種。ある日突然死に直面した灯の命を救ってくれたのは、不思議な力を持つ少年、安倍海風だった。彼と出会った日から、灯の身の回りに奇妙な出来事が起こり始める。

1、嵐のような出会い

やがみ・あかり
八神灯は幼少の頃から体が弱かった。

年中身体がだるく、貧血を起こして倒れることも多かったし、原因不明の発熱にも悩まされた。

両親は、それこそ『名医』と言われる医者に片っ端から娘を診せたが、どの医者も最後には難しい顔をして、首を横に振るのだった。これといって悪いところが見つからない。いくら精密な検査をしても原因がわからない。

いつも最後には『精神的なものが原因』ということで片づけられた。

必然的に灯の日常生活は制限されたが、灯本人は前向きで明るい性格だったので、特に苦に感じたり、自暴自棄になったりすることもなかった。

それなりに努力もして、それなりの高校に進学し、今では友人もでき、それなりに楽しい学校生活を送っていた。

ただ、身体が弱いせいで少々欠席日数が多い事だけが悩みの種だった。――。

その日も出席日数不足による留年を恐れて、多少体調が悪いのを無理して学校に行こうとしたのが悪かったのかもしれない。

いつものように交通量の多い交差点を避け、歩道橋を上がり切ったところで、突然くらりと眩暈を感じた。

とっさに傍の手すりに手を伸ばそうとした瞬間。

金縛りにあったように、灯の身体が動かなくなった。

驚いて助けを呼ぼうとしたが、口からは荒い呼吸が漏れるだけで、声は咽に張り付いたようだ。

ただ、自分の意志に反して、身体は何者かに乗っ取られたかのようにはフラフラと歩道橋の欄干に引き寄せられる。

欄干のすぐ下をハイスピードで行き交う車列が見えた。

———ああ、私はここで死ぬんだ。

訳もなく、変に冷静な心持ちで、だけど灯は確信していた。こんな急に人生の終わりが来るなんて思いもしなかった。思い返せば、なんて儚い一生だったのだろう。

恋もしたかった。

告白されたこともあったが、いつも断ってばかりだった。

好きじゃないと付き合ったりしてはいけないという思いもあったし、臆病な性格のせいもあった。

だけど、一度くらいデートも経験したかったなあ———。

そのまま、なすすべもなく、欄干を乗り越えるように倒れこもうとした時だった。

突然、一陣の風が叩きつけるように歩道橋の上を吹きぬけた。

ふわりと灯の身体が浮き上がる。

「やっと見つけた———」

ぐいっと右腕を引かれ、反転した灯の瞳に映ったのは、茶髪の高校生くらいの男の子の笑顔だった。

「もう大丈夫やで。……もうちょつと俺が着くのが遅かったら、危なかったかもやけど。あ、まだ身体の自由がきかんか？　ちよつと待ってや」

少年は左腕で軽く灯を抱えると、何やら呟きながら、右手で灯の額に文字でも描くように触れた。

とたんに金縛りが解け、身体が軽くなる。ホッと安堵のため息が漏れた。

何がどうなっているのか訳がわからないが、とにかく自分は助かったらしい。

そして、助けてくれたのは目の前の見知らぬ少年のようだった。

「……あ、…あなたは？」

掠れた密やかな灯の声を、それでも少年は聞き取り答えてくれた。

「俺の名前は安倍海風^{あべ みかぜ}。陰陽道^{やがみ}が使えるちよつとやんちゃんな高校1年生や。あんたの名前は、八神灯ちゃん^{あかり}、やろ？」

微かに頷く灯に、海風と名乗る少年はニコリと微笑んだ。

自分の名前を知っているということは、彼は灯だと知って助けてくれたということだ。

高校1年生といえば、自分と同じだ。関西弁を話す知り合いはいないと思うが、母親は京都の出身なので、母方の知人なのかもしれない。

そう思って、灯も笑顔を返そうとしたが、それはうまくいかなかった。

自分の意志に従って動くようになったとはいえ、身体は鉛のよう

に重い。

なのに、芯の部分は凍えるような感覚で、ガクガクと両足にも力が入らない。海風が支えてくれてなければ、きっと立っていられないだろうと、灯は思った。

海風もそんな灯の様子に気づいたみたいで、真面目な顔で灯の表情を伺った。

「やっぱ、あかんか？　ほとんど〈気〉も残ってないみたいやし、辛いかもやなあ。しゃあない。灯ちゃん、ちよつと目、瞑ってくれる？」

素直に目を閉じた灯の唇に、何か柔らかで温かいものが触れた。とたんに唇から熱が伝わり、身体中がカッと熱くなる。

初めての感覚。

何が起こっているのか。どうしてこんな羽目に陥っているのか――

非日常の出来事がバタバタと続いて、灯の頭の中は大混乱だった。

そして、自分の唇に触れているのが海風の唇だと、キスをされているのだと気づいた時、彼女の脳は許容範囲を越え、考える事を放棄し、意識を手放したのだ。

2、不思議な力を持つ少年

「…だから、俺が悪かったって！ そやけど、今時のジョシコーセーやろ？ しかも、東京のジョシコーセーやねんで。関西のんより進んどうる思うやん。キスごときで意識飛ばすなんて、ありえへんやろ？ ……こんなん、想定外やって…ん、じゃあ、おまえはどうしたら良かったって言うんや？ ……あーっ、もう！ 煩いなあ！！」

ブツブツ呟く声に、灯は目覚めた。

そっと目を開けると、自分の部屋の見慣れた天井が見える。

そのまま視線をずらすと、海風が灯の勉強机の椅子に跨りながら――背凭れを前にして、その上で頬杖をつきながら、前方の空間を見据え、小さな声で話す姿が見えた。

彼の他には誰もいない。

「…誰と話してるんですか？」

灯が小さな声で話しかけると、ハッと驚いた顔をした海風が振り向いた。

「目、覚めたか？ どうや、気分は？」

まだ、頭は霧がかかったようにぼんやりしたが、気分は――すこぶる良い。

しかも、どういうわけか生れてこの方感じた事がないほど、気分は良かった。

だけど、質問に答えてくれない海風の質問に答える気持ちはなかった。

じっと黙っていると、海風も気がついたようで、決まりの悪そうな表情で、

「……こちらは……うーん、素人さんには見えないだろうし、信じられんと…思うねんけど、紫苑しおんって言います。俺の式神しきがみ」

と、目の前の空間を指差し、見えない誰かを紹介した。

灯は軽く頷くと、少しベッドから身体を起こし、指差された辺りに視線を向けた。

「はじめまして、紫苑さん」

灯の口から発せられた言葉に、海風が目を見張る。

彼が指差していた、今まで何もなかった空間には、いつのまにか、鮮やかな紫色をした美しい蝶が1羽スツと現われ、灯の部屋の中をヒラヒラ飛びはじめた。

「へーえ、珍しい。紫苑けんげんが顕現するなんて。よっぼど灯ちゃんが気に入ったんやな。ま、さっきもえらい灯ちゃんの肩持ってたもんな。……灯ちゃん、紫苑がよろしゅうってゆうてるわ」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

律儀に蝶に向かってペコリと頭を下げる灯を、海風は心底びっくりしたような表情で見つめた。

「ホンマ、灯ちゃんって変わってんなあ。普通の人間やったら、こんな摩訶不思議なことに出会ったら、パニくるか、拒否するか、ど

っちかやねんけど。：灯ちゃんみたいな反応は初めてや」

「私の知りあいにも不思議な力を持つ人がいるから……。たぶん免疫があるんだと思う」

「ああ、お母さんが壬生^{みぶ}の出身なんやったなあ」

灯の母親は京都の壬生家という旧家の出身だった。

壬生家にも、時々海風のような能力者が現われる。

現当主である灯の叔父も普通の人には見えないものを見る力を持っていると聞いている。

亡くなった灯の祖母などは百年に一度というくらいの特に強い力を持つ能力者だったらしい。

祖母が亡くなったのは灯がまだ幼い頃だったから、灯には祖母の記憶がほとんどない。

だが、海風の持つ明るく大らかな雰囲気は、なぜか馴染みのあるような不思議な気持ちにさせた。

『——キスごときで意識飛ばすなんて、ありえへんやろ？』

ふと、先ほど耳にした海風の言葉を反芻する。

そして、意識を失う前に、唇に感じた初めての感触を思い出す。

今まで、男の子に告白されたり、付き合って欲しいと言われた事は何度かあった。

同級生の友達から一方的に聞かされる彼氏の惚気話に、正直、全く羨ましくないとさえ嘘になる。

だが、灯自身は学校へ通うことだけで精一杯であったため、いつも断ってばかりだった。

男の子と親しく話した記憶もあまりない。

あんなに近くで抱きかかえられたり、ましてキスなんて——。

そこまで考えて、灯は自分の唇にそっと指先を触れさせた。

徐々に頬が熱を帯びてくる。

その仕種から、灯の思考を読んだ海風が、慌てて灯に声をかけた。

「あ、あれは事故みたいなもんやから。気にしたらあかんで。…そう——、ゆうたら人工呼吸みたいなもんや」

「…人工呼吸？」

「灯ちゃんって幼い頃から、原因不明の虚弱体質とか言われてたやろ？ それって、結局、雑鬼や悪鬼って呼ばれてる普通の人間の目には見えない〈妖^{あや}かし〉に憑かれてたのが原因やったわけ。あの時、灯ちゃんはヤツらに〈気〉を奪われて、めっちゃしんどい状態やったから、手っ取り早く、俺の〈気〉を灯ちゃんに分けたったって訳や」

「そうなんですか。…じゃあ、あの時私に憑いていたという妖かしは…？」

「ああ、それはもう、あの時払ったから大丈夫」

海風の話は一見途方もないようだが、なるほどと納得がいく部分も多い。

登校途中の歩道橋の出来事——。

急に身体のがきかなくなったのは〈妖かし〉に操られていた

せいだったのか。

あの時自分には不思議な力に抗う術は何一つなかった。もし海風が来てくれなかったら…きっと今頃、自分は生きてはいなかっただろうと灯は思う。

「…ありがとう」

「へ？　なんでお礼なん？」

「だって、海風くんが来てくれなかったら、私、きっと無事ではなかったと思う。なのに、私、ちゃんとお礼を言ってなかったから…」

ふわりと微笑む灯に、海風は照れたように視線をはずし、ポリポリと髪を掻いた。

「ああ、良かった…。実は…目、覚めて、泣かれたらどうしようかって思ってた。灯ちゃん、なんか…初めてっぽかったし」

海風の言う通り、灯にとって、他人と唇を触れ合わせるなど初めての体験だった。

もちろん、灯も少女らしく、ファーストキスは好きな人などと、ロマンチックな夢を持っていた。

だけど、灯を救うためだったのだ。ここで海風を困らせてどうなると言うんだろう。

灯は自分自身に言い聞かせた。

頬を染め俯きながら、「大丈夫です。緊急事態だった訳ですから…」と灯は口籠もる。海風も少し赤い顔をして、しかし明らかにホッとしたような顔をした。

「礼なんて言わんでええよ。：壬生のじいさんから、その分しつかりお礼頂くつもりやから。：俺、実は灯ちゃんのこと、壬生のじいさんに頼まれてるんや。じいさんには恩もあるし、な」

「：壬生のおじいさまに？」

『壬生のおじいさま』というのは灯の母方の祖父である。

100年に1度の才と言われた祖母の婿養子であったが、祖父自身には霊力は全くない。

息子である叔父に家督を譲って、自身は隠居の身であるが、豪胆でしかも公平な人柄なので人望も厚く、今でも壬生家の中では絶対の影響力を持っている。

「うーん、おじいさまって柄ちゃうけどなあ：まあ、ええか。最近、灯ちゃんの体調、ますます悪うなってたやろ？ そやから、灯ちゃんのお母さんが心配して、壬生のじいさんに相談したみたいや。で、俺に白羽の矢が立ったってわけ。：：：そやけど、壬生の血を引いてるのに、お母さんにも、灯ちゃんにも全く力がないみたいやな。：まあ、その方が良かったって思うけど」

「：：：：どうしてですか？」

「知らぬが仏とは良く言ったもんやなあ。灯ちゃんの場合：そりや、俺もいろんな事例を見てきたけど、これほど一人の人間に妖かしがウジャウジャ・グチャグチャ取りついてるん見たんは初めてや。それがもし自分の目で見えてたとしたら：：：ツ痛ってえー！！おい、何すんだよ、紫苑！！」

からかうように室内をヒラヒラ飛びまわる蝶に、海風は本気で怒

っている。

どうやら紫苑に、何か攻撃を受けたらしい。

陰陽の力を持つものにとって、〈式〉は下僕のような存在のはずだ。

なのに、式である紫苑は海風を全く主人扱いしていないように見える。

2人の間には遠慮がないようだ。

海風自身も紫苑を家族か友人のように扱っているように見える。

海風の真剣に紫苑を追いかける様子を見て、思わず灯はプツと吹き出してしまった。

クスクスと笑いが止まらない灯を、動きを止めた海風が決まりが悪そうな顔で見つめる。

「今も紫苑のヤツに『タフそうな大人の男でも、妖かしの話なんかすると、気味が悪くて、何も食われへんようになったり、寝られへんようになったりするのに、女の子にはもっと気を使え』って……言われててんけど。そんな心配することもないやんな？……」

確かに『ウジャウジャ・グチャグチャ』と訳のわからないものに取りつかれていたと言われては、灯も良い気持ちはしないが――。

「はい。……確かに私には妖かしとか見えないけど……でも、海風くんが払ってくれたんでしょ？　もう安心していいんですよね？」

「ま……あ、な」

「私……おかげで今、本当に身体が楽になったんです。……今まで、一度で良いから体育の授業にちゃんと出たいなあとか、クラブ活動もしてみたいなあとか。ずっと諦めていたんですけど……。この調子だ

「…うん。俺が傍にいたから、妖かしも近寄ってけえへんねんけど、俺が離れたら…たぶん元の木阿弥って言うか…」

「…俺やったら体育とかサボれてラッキーとか思うけど、灯ちゃんって真面目なんやなあ…。うーん…ところでその件やねんけど、ちよつと問題点もあるんや…」

海風は小さくため息をつく、灯が身を起しているベッドの縁にドサリと腰を下ろした。

そして、灯の瞳をじっと見ながら、言いにくそうに言葉を紡いだ。

「うん。今は俺が傍にいるから、妖かしも近寄ってけえへんねんけど、俺が離れたら…たぶん元の木阿弥って言うか…」

「海風くんがいなくなったら…またウジャウジャ・グチャグチャ状態になっちゃうって事ですか？」

「う…ん。俺程度の陰陽の力を持った者が傍におらんと…そうなるかもやなあ」

海風の力が非凡であることは、灯にも察することができた。

壬生家の者も見落とした妖かしに気づいて、一瞬のうちに払ったのだ。

海風の力に匹敵する力を持つものなど、日本中を捜しても片手に余るだろう。

ということは、まだ高校生の海風を始終自分と一緒にいるよう縛り付けるということだ。

そんなことは無理だろう。

「…そうですか」

さっきまで希望ではちきれそうだったのに、一瞬で絶望の底に沈みこんだような心地だ。

力なく目を伏せた灯の頬に、海風はそっと手を伸ばす。

「そんな顔しな。灯ちゃんは、さっきみたいに笑顔の方が絶対ええわ。俺、気になることもあるし、まだしばらくはこっちにおるさかい。そやから、元気出しいや。…そのうち、なんかええ考えも浮かぶやろと思う。…俺の予感はどう当たんねん」

海風がニカツと笑う。

海風の言葉と頬に触れるその手の暖かさに、灯は不思議と心が落ち着いてくるのを感じた。

「うん、そうですね。…紫苑さんも気を使って下さって、ありがとうございます」

部屋の中をヒラヒラ舞っていた紫色の蝶が、導かれるように灯の肩にふわりととまる。

一瞬、不意を突かれて、驚いた表情を浮かべた海風だったが、クスツと笑って、ふと漏らした小さな声は灯には届かなかった。

「なんか気に入ったわ。…ホンマ、壬生のじいさんから話があった時は、正直、気が乗らへんかったんやけど、——楽しくなりそうや」

3、季節外れの転校生

週末が明けての月曜日。

学校へ行くために、朝食のトーストをかじっていた灯は、ダイニングに入ってきた海風の姿を見て驚いた。

「海風くん、その制服って・・・」

「あ、おはよう、灯ちゃん。今日から俺、同じ高校に通うことになったから。よろしゅう頼むわな」

海風が着ていたのは、灯の通う高校の制服だった。

先週、灯の歩道橋絶体絶命事件があつてから、海風は灯の家に滞在している。

大学生の灯の兄が下宿して一人暮らしをしているので、空いている彼の部屋にそのまま海風が使っているのだ。

「あら、海風くん。おはよう。もう制服も届いたの？ 手回しが良いわね」

灯の母親がキッチンから海風の分の朝食をテーブルに運ぶ。

「あ、オハヨーゴザイマス。壬生^{みぶ}のじいさんが転校の手続きも全部手配してくれてて。制服まで昨日のうちに届いてて、俺もびっくりです」

気になることがあるから、しばらくはこちらにいらすと海風は言っていた。

『しばらく』とは1，2週間程度のことかと灯は思っていたが、高

校の転校手続きをしてということは案外長く側にいてくれるのかもしれない。

そう考えると、灯の気分は一気に浮上した。

「あ、でも、うちの学校、一応編入試験受けないといけないんじゃないか……」

「あ、それは俺が通っていた高校の成績証明書でOKやった」

「海風くんの通っていた学校は進学で有名な洛北高校よ。その中でも成績優秀者に入っていたらしいから、灯の高校なら楽勝よね」

さりげなく娘をコケ下ろしている母親の言葉に軽く凹むが、それよりそんな進学校に通っている海風が短期間とはいえ、灯の高校に編入し迷惑にならないのだろうか。

「海風くんの学校、勉強も厳しいんでしょ？　こちらの学校に通っている間に勉強が遅れてしまったら……また京都に戻った時、すごく困ることになるんじゃないか……。私のせいで海風くんにそんな迷惑かけるのは……」

灯が恐る恐る話しかけると、海風はトーストを頬張る手を休め、キョトンとした表情でテーブルの反対側に座る灯を見つめた。

「灯ちゃんて、心配しいやなあ。勉強なんて要はしっかりした目標と本人のやる気次第やん。場所はどこでも同じやろ？」

「しっかりした目標？」

「うん。…俺、将来は建築士になりたいの。陰陽道ができる建築士

ってのもなかなかイケてるやろ？　そのために今はK大工学部の建築学科入学が、俺の目標」

灯の瞳が驚いたように見開かれる。

「すごいね。私と同じ年なのに、将来のこと、しっかり考えて…」

テーブル横の対面キッチンから灯の母も感心したように声をかけた。

「まあ、海風くんが安倍の家を継ぐんだと、叔母さん思っていたわ。安倍の家で海風くんが一番陰陽師としての能力が高いって噂だったから」

「昔と違って、今は陰陽道だけでは生活できませんから。身内には政治家や役所関係の仕事に従事する者が多いけど、俺には合わへんし。それでなくても、副業で人間のドロドロしている部分に関わることが多いのに、本業でもっていうのはちよっと、ね」

そうか。常人にない力があって、名家の出身で、頭が良くって。何事にも恵まれている海風くんにだって、色々悩みはあるんだろう。

いや。普通の人間には考えられないような苦労があるのかもしれない、と灯は思った。

「どうして『建築士』なの？」

「俺、……京都に住んでるやん。京都って千年も昔の建築物が仰山残ってる街やろ？　しかもそれらは単に古いだけじゃなくて、美

しくって無駄がないのに行き届いている。俺もそんなものを創りたい。千年先もこの世に残るものを創るってすごいよなって思うし。一生かけても価値あることや」

「へえ…なんか……」

灯は心から感心した様子で、目を見張って海風を見つめている。海風は突然無性に恥ずかしくなって、こめかみの辺りをポリポリと掻いた。

何で知り合って間もない人間に、自分の立ち入った問題をペラペラしゃべっているんだろう。

自分はポーカーフェイスで、親にも誰にも心の中を晒すようなことはほとんどない。

心を晒すと言うことは、相手に自分の弱みを与えることになりかねない。

安倍のような家に生まれた自分にとって、それは命を脅かす事に繋がる場合がある。

なのに、将来の夢なんて私的な事を安易に話している自分が信じられない。

力の波動は全く感じられない。にも関わらず、灯には何か自分の調子を狂わせるモノがある。

そんなことを思いながら、再び視線を向けると、灯は。

「…すごくステキだね」

とふんわり微笑んだ。その笑顔に目が釘付けになった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

安倍海風の編入第1日目。

「京都の学校から編入してきました、安倍海風です。よろしゅうお願いします」

1時間目の前に、教卓の横でにこやかに自己紹介して、その日の放課後には海風はすっかりクラスに馴染んでいた。

まさか同じクラスになるとは思っていなかった灯は嬉しくて、休憩時間のたびに海風に話しかけたいと思ったが、とても近くに寄れないほど、彼の周りは男女を問わず、クラスメイトにずっと取り囲まれていた。

体育の時間、サッカーで海風がハットトリックを決めたり、少々意地悪な数学の先生が出した問題を軽々解いてしまったりといったことも、彼の人気を高めたようだった。

関西弁で、気さくで話しやすい海風の人柄にもよるのだろう。今も相変わらず海風は5、6人のクラスメイトの質問攻勢に合っていた。

「安倍君って兄弟、いるの？」

「うん。兄貴と弟の三人兄弟」

「へえ、いくつ離れているの？」

「兄貴は一つ上で、弟は俺より3つ下や」

「じゃあ、高2と中1だね。お兄さんもこの学校に編入したの？」

「いいや。一家で俺だけが、叔父宅に世話になることになって。まあ、前の学校で色々辛いことがあってな……」

え、お父さんって海風くんの叔父さんだったわけ？ いやいや、安倍家って壬生のおじいさまの知り合いだったんじゃない？

海風に二人の兄弟がいることは母から聞いたが、前の学校で色々辛いことがあったなんてことは初耳だった。

数日前に出会ったばかりの関係だ。

海風自身のことと知っていることと言えば、代々続いている陰陽道で有名な家の息子で彼自身すごい力の持ち主だということと、簡単な家族構成くらいだった。

帰ったら、彼自身のことも色々聞いてみよう。

海風に帰りはどうするのか聞きたかったが、クラスメイトと会話が弾んでいる海風に話しかけるのは躊躇われた。

鞆を持つと、灯はいつもの用事を済ませて帰宅しようと教室を後にした。

海風が妖かしあやを祓ってくれたせいかな、今日は体調が良い。

灯が正門近くの花壇に寄ると、園芸部の竹山先生が水道にホースを繋いで、木々や草花に水をあげているところだった。

竹山先生は定年間近の“おじいちゃん先生”だ。

教科は日本史だが、灯は直接教えてもらったことはない。

趣味で育てた菊はコンクールで大きな賞をもらったこともあり、

だから園芸部の顧問をしているそうなのだが、今日日、園芸部等という地味なクラブに好んで入る高校生も少なく、放課後は顧問一人で植木の世話をしていることが多かった。

“いつもの用事”というのは、竹山先生の手伝いだった。

虚弱体質のため、正規のクラブ活動を諦めていた灯は、体調の良いときは竹山先生を手伝って帰宅することが多かった。

手伝ってみると、植木の世話は案外灯の性格に合っているようだった。

『植物も人間も愛情を注げば注いだ分、ステキに育つもんだ』というのが口癖の穏やかで、博学な先生とは何となくウマがあったし、手伝った後『助かりました。ありがとう』と御礼を言われると、こんな自分でも人の役にたっていると感じられて嬉しかった。

何より黙々と植物の世話をするのは気持ちが落ち着いて、楽しかった。

灯が黙々と雑草を抜いていると、花壇の横にある本館の2階の窓から、男の先生が、「竹山先生、お電話です」と声をかけた。

丁度職員室の窓だ。

「あ、じゃあ、八神さん。ちょっと職員室に戻ってくるから。ホースとかそのままにして、帰ってくれて良いからね」

慌てて職員室に向かう竹山先生に向かって灯は、

「大丈夫です。もう水遣りも終わってるし、ホースは園芸部の倉庫に片づけておきますから」

とにっこり笑って答えた。

一瞬逡巡するような表情を見せたが、「じゃあ、よろしくお願いします。無理しないようにね」と少し心配そうな竹山先生を笑顔で見送って、灯は雑草を入れたポリ袋を裏門脇にあるゴミ収集場所に運び、水道栓から園芸用ホースを抜いた。

日頃の倦怠感もなく、気分も良いので大丈夫。

灯はホースを丁寧に巻き、両腕で持ち上げた。

結構重量感がある。

花壇の脇に置いてある鞆が気になったが、貴重品も入っていないし、園芸部の倉庫ならここから近いし、大丈夫だろう。

下足室に寄って靴を履き替えるのも面倒なので、校舎の反対側にある倉庫まで、校舎を迂回して行くことにした。

腕が疲れてきたので、ホースを抱え直し、校舎の反対側に出る角を曲がろうとした時。

灯は、誰かが駆けてくる足音を耳にした。

注意する暇もなく、角を曲がってきた人物は、思いきり灯にぶつかってきた。

衝撃に小さな悲鳴を上げて、地面に投げ出されて驚いた灯が、ぶつかった相手に顔を向けようとする、ふと暖かい掌がその額に触れてきた。

「大丈夫？」という声を聞いたとたん、意識が沈んで、闇が訪れた。

4、優しい人

ぼんやり目を開けると、白い天井が目に入った。

「あ、気が付いた？」

その声に目を向けると、一人の男子生徒が心配そうな顔をして枕元に座っていた。

「ここは？」

「保健室だよ。ごめんね。急いでいたものだから、思いっきり君にぶつかってしまって。気を失ったときはホント焦ったよ」

男子生徒の話を聞いて、灯は自分が保健室で横になっている理由を納得した。

どうやら、また気を失ってしまったらしい。

海風に妖かしを祓ってもらって、気分も良くなって、すっかり普通の女の子に戻ったつもりだったが、少しぶつかったくらいで意識を失うなんて。以前と何も変わっていない。やはり自分は人に迷惑をかけてしまう存在なのだと、灯は落ち込んだ。

物心ついた時からずっと家族に負担を強いてきたと思う。

欠席がちだったため、友人もほとんどいない。

これまでも。そして、これからたぶん――――。

「こちらこそ、迷惑をかけてしまったようで……ごめんなさい…」

言ってる尻から、ポロポロと涙が溢れ出した。

「い、いや。君はなにも悪くなくて：僕が走ったりしてなければ：
：ホントごめん！　どこか痛い？　やっぱり病院に行った方が良く
かな：」

「大丈夫：です。：気にしないで下さい。私、身体が弱くて、こん
な風に気を失ったりするの初めてじゃないんです。：私ったら、
こんなふうにいるも周りに迷惑かけるばかりで：って思ったら：
何だかすごく悲しくなって：。どこか痛い訳じゃないですから：」

男子生徒はちょっと困った顔をして、ポケットから男物のハンカ
チを取り出すと、灯の手に握らした。

「僕は2年A組の水木志樹^{みずき・しぎ}。：君の名前は？」

「：1－Cの八神灯です」

「僕は：八神さんに迷惑をかけられたなんて、これっぽっちも思っ
てないよ。僕の不注意で君に嫌な思いをさせてしまったようだね。
本当に申し訳ない」

「でも」

「：君が思うほど：周りもきっと迷惑だなんて思っていないよ。君が
困っていて、自分が助けてあげられるなら、むしろ：周りは嬉しい
と思うんじゃないかな。：僕なら、そう思う」

「え」

目頭にハンカチを押し当てて、顔を上げると、うつすらと頬を染

めた水木が目に入った。

自分を元気づけてようとしているのだろう。

優しい人のなだと、灯は思った。

「ありがとうございます」

灯は感謝を込めて、軽く微笑んだ。初対面のはずなのに、先輩のはずなのに、何だかとても気さくで話しやすい雰囲気だった。

「実はすっかり良くなったと…治ったと思っていました。両親にもこれからはあまり心配をかけなくてすむって思っていたのに、そうでなかったとわかって……ショックだったんです、きつと。これからの事を考えたら…すぐく不安になってしまっ

海風もいつまでも自分の側に引き留めていくわけにもいかないだろう。

なまじ海風のお陰で、『普通』の状態がどのようなものか知ってしまっただけに、海風がいなくなって、以前の辛い体調に戻ることを考えると絶望的な気分になった。

そんな灯の言葉に、水木は言葉を選びながら慎重に返事をする。

「まだ君は高1だし、両親の世話になるのは当たり前だと思うけど…でも、君が気にするなら、資格とか取って見たら？」

「資格？」

「僕も詳しくはないけど、パソコンとか翻訳とか在宅でもできる仕事もあるだろ？ 在学中に必要な資格を取れば、卒業しても家で仕事ができるんじゃないかな。在宅の仕事なら多少は体調も気遣いな

がらできるだろうし、何より収入ができれば家族に気兼ねすることもないだろうし」

「収入って……お金をいただけるとのことですか？」

「そりゃ、仕事をすれば見合った給料がもらえるだろ？ うまく軌道に乗れば、自立することだってできるかもしれないし……」

「自立————」

灯にとっては考えたこともない、夢のような言葉だった。
家族に迷惑をかけなくても、海風に頼らなくても、生きていく道があるかもしれない。

「やっと、笑ったね」

水木が灯の顔を見て、ニコリと笑った。

「……ありがとうございます、水木先輩。お陰で一気に世界が明るくなったみたいです。私、そんなこと、思いつきもしなかったから」

「そっか。……在宅でどんな仕事や資格があるのか、僕もまた調べておくよ」

「ありがとうございます」

「もう、大丈夫？ また倒れてもいけないから、君の家まで送っていくよ」

そこまで迷惑をかけられないと灯が断ろうとした時だった。

「おーきに、先輩。でも、大丈夫です。灯ちゃんは俺が送って行くことになってるさかい」

保健室の入り口を入ったところに、いつからそこにいたのか。

こちらを睨むように立っていたのは、自分と灯の二人分の鞆を持った海風だった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

帰宅後、私服に着替えると、灯はパソコンを立ち上げた。

検索をかけると、水木志樹が言っていたように在宅の仕事も色々あることがわかる。

文字入力とかホームページ制作などパソコンに関係するものが多いが、イラストレーター・翻訳・テープ起こし等というものもある。在宅でのお仕事というのは需要も供給もあるのか、かなりの数のホームページがあるようだ。

いくつか目を通したが、かなり明るい見通しを感じて、灯は頬が緩んだ。

だが――――。

ふと気掛かりなことを一つ思い出して、灯の思考が揺れる。

いつも明るく^{ひょうきん}飄軽だった海風が、保健室に迎えに来てくれた以降、

ひどく不機嫌な様子だったのだ。

帰り道、気を失った前後の様子について、海風に尋ねられた。

あの時は校舎の向こうから誰かが走ってくる足音が聞こえて、次の瞬間にはぶつかっていたんだった。相手を見ようとしたら…何かが額に触れて…そうしたら気が遠くなって…気が付いたら、保健室にいて、水木先輩が運んでくれたことを知ったのだった。

悲しくて、情けなくて、涙が止まらなくなって……。

一つ一つ思い出しながら、海風に説明した。するとみるみる海風の表情が硬くなっていったのだ。

いつも海風が饒舌なため、灯は彼の話に相づちを打つだけで話は弾んだ。

その彼が突然無口になったため、その後はほとんど会話らしい会話が成立しなかった。

何か彼を怒らせるようなことを言ったのだろうか。

それとも、単に彼の虫の居所が悪かったのか——。

まだ海風と知り合って、数日である。

表面的に彼が明るく剽軽であっても、真の彼がどんな人かはわからない。

今日もクラスメイトに「前の学校で色々辛いことがあって」なんて言っていたし……。

ぼんやりと考えていると、コンコンとノックの音がした。

「は、はい！」と返事をするやいなや、「入るで」と声がして、ドアの間から当の海風が顔を見せた。

「叔母さんが夕食やってなんぼ声かけても返事がないから、また具合が悪くなったんやないかと思てんけど。大丈夫？」

「え、うん。もう大丈夫です……」

あまりにパソコンと自分の思考に熱中していたため、母親の声に気づかなかったらしい。

良かった、いつもの海風だ。

どうやら、自分に対して怒っていたわけではなかったようだ。

「……良かった。帰り道、海風君が全然しゃべってくれないから、何か怒らせるようなことをしたのかな、って考えてたんです」

「え！？ ああ、考え事。ちょっと納得できん事があつたし、何かイライラしてたさかい……。でも、灯ちゃんは悪うない。……心配させたんやったら、ごめんな」

海風が笑ってくれるから、灯も自然と笑みが浮かんだ。

「……ところで、ちょっと手、出してくれる？」

言われて出した掌に、何かが置かれた。

透明な無色の石でできた勾玉。

そのペンダントトップに細い革ひもがついている。

「これ……お守りやさかい。この水晶の勾玉には破邪の力がある。俺が物心ついた頃、母が俺にくれたもんや。これ、着けといて。灯ちゃんのこと、守ってくれると思う」

「まだ……何か、危険なことでもあるんですか？」

「…念のためや。でも、俺が良いって言うまでは、絶対離さんというて。俺も24時間、灯ちゃんの側におれるわけやないし」

海風はそう言っ、水晶を灯の首にかけると、首の後ろできゅつと紐を縛った。

5cmくらいの水晶の勾玉を指で弄ぶと、ヒヤリとした感触が清冽な気を放っている。

「でも、お守りって…私が持っていて、海風くんは大丈夫なんですか？ 手放したりしたらお母様もご心配なさるんじゃない？」

「俺は灯ちゃんを守るために、ここにおるんやで。そやったら、色々手段を講じて、万全を期すべきやろ？ 自分の身は自分で守れる」

面と向かって「守る」と言われ、灯の頬がカッと熱を持つ。

俯いて、だけどそっと上目遣いに海風を見上げて、礼を言った。

「ありがとうございます。じゃあ、お預かりしておきますね」

海風も不意打ちを食らったように顔を赤くし、頷いた。

急に停滞した空気を振り切るように部屋を見回し、ふとクローゼットの外に掛けられていた灯の制服に目をやった。

「灯ちゃんの学校のブレザーも可愛いなあ。チェックのスカートも、柄といい、短めの丈といい、めっちゃナイスや。俺んところは昔から変わらず、男子は紺の詰め襟、女子は膝丈セーラー服やから、なんや新鮮な感じがするなあ」

焦ったように話題を変えた。

気詰まりな抗しがたい雰囲気を打破するためには、何か他のことを話し続けないといけないような気がした。

手持ちぶさたな様子で、灯の制服のリボンにそっと触り、肩の辺りを軽く手で叩く。

「…なんか海風くん、思考がおじさんみたい————」

海風の言葉に、明らかに灯はむっとした表情をした。

どうやら話題の転換には失敗したようだ。

「おじさんって…。別に健全な男子高校生としては、普通の思考やと思うけど？ 可愛い制服やったら、着てる子も可愛く見えてええやん？」

「…そう言えば、今日は休み時間の度に、可愛い子に囲まれてて…海風くん、すっごく楽しそうでしたね！」

「俺、別に喜んでいた訳じゃないし。どっちかってゆうと、休み時間の度につきまとわれてウザかった。けど、転校生がいきなり愛想のない態度取るわけにもいかんやろ？」

転校生が愛想のない態度を取れないという言い分は分かる。

だが、どう見ても海風の態度には「ウザい」気分は感じられなかった。

だから、邪魔したら悪いような気がして、灯は話しかけるのを遠慮したのだ。

「その割には、プライベートなこと…前の学校の悩みなんかもペラペラとしゃべっていたじゃないですか」

「へ？ そんな話、しとったかなあ」

本当に覚えてないのか、眉間に皺を寄せ「うーん」と考え込んでいる海風の顔を、灯が覗き込む。

「ほら、『一家で俺だけが、叔父宅に世話になることになって。まあ、前の学校で色々辛いことがあってな』って……」

そうなのだ。『辛いことがあって』なんて海風が言うものだから、端で聞いていた灯も心配してしまったのだ。

「————ああ、あれな。…あれは嘘」

「え？ 嘘？」

「うん。別に辛いことなんかなかったけど、ああ言っておけば、みんな、それ以上人のプライバシーには干渉してこんやろ？ なんや、本気にしたん？ 第一灯ちゃんのお父さんが俺の叔父さんじゃないことは、灯ちゃんが一番よう知ってるやん」

「で、でも、あんな言い方したら、きっとみんな信じたと思いますよ。ダメです。人を騙すようなこと、言っちゃ……」

「嘘は方便ってゆうやん。円滑な人間関係維持のためには必要不可欠なもんや。……ひよつとしたら…まともに受け取って嫉妬した？」

「嫉妬って…そ、そんな訳ないじゃないですか！」

灯は、海風にずっと話しかけられないことを寂しいと思ってはい

た。

自分に話してくれなかったプライベートなことを、知り合ったばかりの女の子に話しているのを見て、何だか嫌だと感じたことも事実だ。

だけど、それを『嫉妬』なんて軽薄な言葉で追いやられて、灯はムツとした。

前の学校で何か良くないことがあったのかと心配していたのに、それが嘘だったこと、しかも海風が全く良心の呵責を感じてない事も心証を悪くしたに違いない。

だけど、灯の中で、何かがブチッと切れたのを感じたのは、次の言葉を聞いたときだった。

「……それより、灯ちゃんこそ、氣いつけな。……ホント騙されやすい性格みたいやし……」

海風の視線は勉強机の上のパソコンに向けられている。

パソコンの画面には『在宅でパソコン初心者でも楽に稼げる 私
はこうして年収一千万円を稼いだ』という文字が躍っていた。

5、仲たがい

翌日の昼休み。

誰もいない学校の屋上で、海風はほおつと長い溜息をついていた。

————あれから灯は口をきいてくれない。

いつも要領の良い筈の海風だったが、何故か灯相手だと、調子が狂い、うまくいかないのだ。

上目遣いに、はにかんだ笑顔で礼を言われ、なぜか頭に血が上ってしまった。

会話がマズい方向に進んでいるのは気がついていたのだが、柄になく冷静さを欠いてしまった。

いつものように適当に誤魔化せば良いとわかっていたのに、何故だか灯に嘘はつけなかった。

何故そんな心持ちになってしまうのか————自問自答してみるのが分からない。

まだ妖かしを相手にしていた方が、勝手が分かる。
精神衛生上よっぽどましだと思う。

海風にとって、精神衛生上よろしくないことがもう1点。
それが目の前に繰り広げられている光景だ。

海風が今いる旧館の屋上からは、平行に並ぶ新館の教室の様子を見渡す事が出来る。

旧館の1、2階には職員室や特別教室などが並び、3階に3年生の教室がある。

目の前の新館は、1階に図書室や会議室、2階は1年生の教室、

3階に2年生の教室となっている。

海風の位置からは2年A組、B組辺りの教室の様子がよくわかった。

校舎の端にある2年A組の窓際、前から5番目に座っていたヤツ——水木志樹が、扉の近くで話し込んでいた男子学生に呼ばれ席を立つ。

扉の陰から、ひょっこり顔を覗かせているのは、灯だ。

水木が近づくと、ペコリと頭を下げて、灯が何かを差し出した。

たぶん昨日洗っていたハンカチだろう。

確か保健室で水木に借りたと言っていたから……。

遠くて表情までは分からないが、きっとあのはにかむような笑顔を浮かべているのだろう。

「あの水木ってヤツなんか、誰がどう考えたって、怪しいやん。なんであんなに脳天気になを信じられるかな——」

胸の奥が苛立つ。

なぜあんなに無防備なのか。

海風は表面上は人当たりの良い人物を装ってはいるが、基本的に人間は信用しない。

何事も疑ってかかる慎重さと生来の勘の良さのお陰で、今まで無事にやってこれたと自負している。

『……それより、灯ちゃんこそ、気いつけな。……ホント騙されやすい性格みたいやし……』と、思わず昨夜言ってしまったのは、単に胡散臭いサイトに灯がアクセスしているのを見咎めただけでなく、水木のような初対面の男にも全く警戒心を持たない灯にイライラしていたせいだった。

しかも、危険は去った訳ではないのに……。

灯が倒れたと知ったとき、海風は信じられなかった。

先週、灯に憑いていた妖かしを全て祓って、今までの経験から自分の間は大丈夫だと思っていたからだ。

しかも、保健室に灯を迎えに行ったとき、また灯から気を奪われた気配があった。

灯は衝突したショックで貧血でも起こしたのだと思い込んでいたようだが、海風の陰陽師としての勘は楽観できるものではないと告げていた。

自分の鼻先で、堂々と掠め取られたようなものである。

その事實は、海風のプライドを酷く傷つけるとともに、今度の敵が一筋縄ではいかないことを暗示していた。

真っ先に水木志樹を疑ったが、彼からは全く妖かしの気配は何えなかった。

だが、氣にくわないヤツだと海風は思う。

その水木を、灯がまるで命の恩人のように、深い信頼を寄せている様子も氣にくわない。

「……ほんまに命の恩人なんかは、俺だっちゅーの」

なのに口も聞いてもらえない現実には納得いかないが、敵を油断させるには良いかもしれない。

再び灯が狙われるような予感はある。

それは確信と言って良いかもしれない。

今度は敵に遅れを取ることは許されない。

だから、打てる手は全て打っておく――――。

＊ ＊ ＊ ＊

その時。

海風に見られていることも知らず、灯は2年A組の教室の入り口で、水木志樹と和やかに話し込んでいた。

灯が借りていたハンカチを渡すと、水木は「ちょっと待っていて」と言って、自分の机からA4版のプリントの綴りを持ってきた。

「在宅でどんな仕事や資格があるか探してあげるって言うてたでしょう？」

パソコンで調べプリントアウトしたらしい資料だった。

数枚を重ね、左上をホッチキスで止めている。

保健室で灯が話したことを気にかけて、本当に調べてくれたのだ。水木の親切が、本当に嬉しかった。

「資格って思った以上にたくさんあるものだね。吃驚したよ。君の参考になれば良いんだけど……」

「ありがとうございます。家に帰って、じっくり読みますね」

灯の感謝の言葉に、水木も照れたように微笑んだ。

「頑張ってね。君が仕事を持って、自立した生活を送れるようになったら、さぞかしご両親も安心して下さるだろうね」

「そうですね。両親には小さい頃から心配かけてばかりだったから

……私が自分でちゃんと生きていけるようになったら、すごくびっくりして……でもとても喜んでくれると思います」

「いいね、そういう幸せなサプライズって。……いつそのとき、ちゃんと資格を取って見通しがたつまで、家族に内緒にするのも面白いね。きっと後の嬉しい驚きが何倍にもなるよ」

水木を見上げる瞳がびっくりしたように丸くなる。

家族に内緒で何かをするなんて事は、灯には思いもつかないことだった。

だけど、それは悪いことではないはずだ。

「あ、そうですね。前もって言っておいて、失敗しちゃったら、すごくがっかりさせるだろうし……。秘密にしておいて、後でびっくりさせるっていうのも何だかワクワクしちゃいますよね」

「うん。良ければ僕も応援するよ。僕の父親は教師だから、家にも色々参考にする本もあるし、相談にも乗れると思うよ」

「ありがとうございます」

その時、水木と同じクラスの生徒が教室に入ろうとして、二人は教室の出入り口を塞いでいることに気づいた。

邪魔にならないよう、非常階段に続く扉の横、廊下の行き止まりのスペースに場所を移す。

「……ところで、昨日君を保健室に迎えに来たのは、君の家族？ それとも彼氏？」

「え？」

保健室に迎えに来たと言うのは、海風のことだろう。

「ぜんぜん！！ 海風くんは家族でも彼氏でもないですよ」

「ふん。そうなんだ。……じゃあ、彼は君のことを心配しているようだったけど…、彼にもあまり頼らない方が良くかもしれないね」

「え…？」

「だって、家族でも彼氏でもないなら、いずれ君から離れていく人でしょう？ どうせ目の前からいなくなるような人だったら、最初からあてにしない方が良くよ」

いずれ君から離れていく――――。

その通りだ。

海風は安倍家の跡取りで、いつまでも自分の側にはいられない。

灯の体調の目処がたてば、京都に帰っていくだろう。

それに灯は夕べの海風の言葉にも拘っていた。

『……それより、灯ちゃんこそ、気いつけな。……ホント騙されやすい性格みたいやし…』

海風は将来の夢もしっかり持って、それに向かって着実に歩いている。

ちょっと軽い部分もある海風だが、根本の部分で灯は海風を尊敬していた。

なのに自分はいつまでたっても、家族の庇護の元に、未来の展望もなく、毎日をようやく過ごしているような状態だ。

同級生なのに、君は世間知らずで幼いね、と。

灯には海風の言葉がそんな意味を含んでいるように聞こえたのだ。

灯は制服の上から、首にかけている水晶の勾玉にそっと手を添えた。

海風と対等に話せるようになりたい。

そのためには、自分にもせめて将来の見通しがほしい。

「そうですね。海風くんにも変に心配かけるより、内緒にしていた方が良くかもしれませんね……」

だけど……、

自分の未来に海風はいない。

だったら、初めから何も期待しない方が良くのかもしれない――
――。

6、疑心暗鬼

それから数日経った放課後。

家路につく生徒の群れが一段落した正門近くにある花壇で、八神^{やがみ}灯^{あかり}はいつも通り、園芸部の手伝いをしていた。

日差しの強さに初夏の訪れを感じる。

植物もいきいきとする季節だから、しばらく放っておくとすぐ雑草が茂ってくる。

この時期の手入れは大変だが、手をかければかけるだけ、庭園の草木は夏以降の花の美しさや実りの見事さで応えてくれる。

灯が手にしたホースから、勢い良く出た水が、陽光にキラキラ輝きながら弧を描いている。

安倍^{あべ}海風^{みかぜ}は離れた校舎の陰から、その様子を伺いながら、そつと溜息をついた。

水晶の勾玉を渡した後気まずくなってから、灯は海風を避けている様子がある。

だが、海風はあえて灯との間に開いた距離を縮めようとはしなかった。

灯を狙っているものがあるなら、油断させておいたほうが良い。

ただ、何か起こった時遅れをとらぬために、こうして始終灯の動向には気を配っている。灯本人は夢にも、気づいてないが。

「しかし……ほんま、お人好しなヤツやなあ……」

ずっと観察してきたが、灯は放課後の掃除とか日直の仕事とか、良いように押しつけられている節がある。

なのに、みんなはクラブとかで忙しいし、私はそうじゃないからと、ニコニコしている。

皆、適当な理由を付けてサボる口実にしているに違いないと海風は思うが、世間知らずだからか、灯にはそのような思考回路はないらしい。

この放課後の日課となっている花壇の水まきや草引きにしてもそうだ。

古の時代から陰陽道の第一線で活躍してきた安倍家では、能力者の生まれやすさの確率が高い。

特に、海風の持つ力は一族の中でもずば抜けていたため、まだ幼い頃から彼は家業の手伝いに駆り出されることが多かった。

必然的に物心ついた頃から、彼は人間のドロドロしている部分を身をもって知る経験を重ねてきた。

だから、世間知らずで純真な灯の言動は、海風から見れば危うくて歯がゆくて仕方がないのだ。

しかし一方で、気になって仕方がない。

灯の真面目さ、ひたむきさ。

打算のない優しさ、思いやり。

どこまでも真っ直ぐ、前を見つめている瞳。

灯の持つそれらは、安倍家の今の立場を手に入れる代わりに、海風がどこかへ置き忘れてきたものだった。

「やあ、姫を守るナイトくん。確か名前は安倍——」

突然後ろから声をかけられ、海風はギョツとして振り返った。

全く気配を感じず、不意を突かれるということは、海風には珍しいことだった。

「…安倍海風です。竹山せんせ…」

「そうそう、安倍海風くん。京都の名門洛北高校からの編入だったね」

海風は園芸部の顧問である、白髪混じりで小柄で穏やかな風貌の年配教師を胡散臭げに見詰めた。

「…そうですけど…先生、『姫を守る』云々というのはどういう意味ですか？」

だが、竹山先生は少しも動じる様子もなく、却って笑みを深くした。

「洛北での君の成績を見たよ。この高校では君の実力比べ、あまりに力不足だからね。たぶん君の親戚だという八神さんが原因かなと思っただけだよ。日本史を専攻の…特に平安時代を専門としている教師としては、君の前住所も非常に興味深い。確かあの有名な安倍本家の住所と同じだったね」

「……えらい、詳しいんですね、先生」

「それに、あの八神さんも実に不思議で興味深い生徒だしね」

灯はこの竹山先生にかなり好感を持っているようだった。

人が良く、年配の竹山をむしろ助けてあげなればと思い、放課後の園芸部の手助けをかつているようなところがある。

だが、どうして。一筋縄でいく相手ではなさそうだと、海風は思った。

「ほら、君の脇に植わっている紫の花。それは万葉集の歌にも詠まれている野草なんだが、都会のような環境で、人の手で育てるのは難しい植物なんだ。…だけど、なぜか彼女の手にかかる、どんな植物も生き生きと育つ。…植物を育てるのは僕の趣味の一つでね、興味も知識も人一倍あるつもりだが、それでも彼女が何だか魔法でも使ってるかのように感じる時があるよ」

ちょうど灯は水を撒き終わって、片付けを始めていた。

「一時はかなり体調が悪いようで心配したが、君が転入してきたあたりから、彼女も随分元氣そうになってきた。潰れかけの園芸部を影で支える貴重な人材だからね、僕としても本当に嬉しいよ」

竹山はニヤリと笑って海風に背を向けると、何事もなかったかのようにホースを手につつ灯に近づき、話しかけた。

灯は無邪気な笑顔を見せている。

やがて竹山がホースを灯から受け取り、二人は並んで園芸部の倉庫の方角に向かう。

厳しい目つきでそれを眺めていた海風は、やがて踵を返した。

突然一陣の風が吹きすぎ、庭園の樹木がザザッと震え、葉が舞う。灯が驚いて後ろを振り返った時、紫の花が咲く端には、もう誰の姿もなかった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

灯が今の高校を受験しようと思ったのは、自宅から近いことが大きな動機だ。

徒歩で20分。

満員電車で揺られての通学に自信がなかった灯には、程よい距離で歩いて通える学校というのは有り難かった。

娘の体力を心配していた両親も、灯の選択に賛成してくれた。

レベル的には中堅の私立学校である。

私立なのに、あまりガツガツと勉強にばかり偏らない校風も、灯には合っている。

クラスメイトも温厚な人が多く、内気な灯が人付き合いに悩むようなこともほとんどなかった。

その日も、灯はいつものように一人でゆっくりと家路を辿っていた。

学校までの道のりはほとんど閑静な住宅街を通る。

ただ1箇所、大きな道路を横切らねばならず、一度その陸橋の上で危ない目にあった灯は、それからそこを通る度、恐怖に足が竦むのだ。

海風が転校してきて初めの頃は、彼と一緒に帰ってくれたから平気だった。

だが、海風と気まづくなってから、声をかけるのも憚られて、以前と同じように灯は一人で下校していた。

大丈夫――――。

海風くんのお守りもちゃんとしているし。

これには破邪の力があるって。私を守ってくれるって。

海風くんがそう言ってた。

性格的には問題がある気がする海風だが、彼は自分に嘘はつかない気がする。

制服の上から、身につけた勾玉の存在を確認するように、ギュッと胸元を握りしめた。

呼吸を整えて歩道橋を見上げると、一步一步ステップを上っていく。

「八神さん！」

灯は聞き覚えのある声に振り返る。

「水木先輩……」

水木志樹の穏やかな笑顔に、ホッとして灯も笑顔を浮かべる。

水木は軽く一段抜かして歩道橋の階段を駆け上がると、灯の隣に並んだ。

「今帰り？　八神さんも歩いて通学してるんだ？」

「水木先輩も？　家はこの近くなんですか？」

「……だって、八神さんと僕、同中でしょ？」

「え？」

「笹原市立第2中学校出身でしょ？」

「…はい……？」

「全然僕のこと、知らないんだ？　一応生徒会の役員なんかもしていたんだけど」

「!?!?!、ごめんなさい」

「まあ、学年が違ったから、君が知らないのも仕方がないか。実は僕も君のこと、どこかで見たことがあるくらいの認識しかなくて。この前うちのクラスまでハンカチを返しに来てくれただろ? その時見かけた同中の友人が教えてくれたんだ」

クスクス笑う水木につられ、灯も笑った。

「あ、今日、この後時間ない?」とさりげない様子で水木が尋ねた。

「良かったら、うちに来ない? この前言っていた資格関係の資料さ、父が色々持っていて。でも、重くて学校まで持っていくのは骨が折れるからさ、見て必要なところだけコピーしてあげるよ」

自分の事を気にかけてくれる人がいるというのは嬉しかった。

一方で先日の海風の言葉が脳裏を掠める。

『…気いつけな。……ホント騙されやすい性格みたいやし…』

あの時はかなりムツとした海風の言葉だったが、自分が世間知らずなのは自覚している。

それほど親しいわけでもないのに、一人でよく知らない男の人の家にお邪魔したりしたら、また海風に何を言われるかわからない。

水木は好意で言ってくれているのだと思うが、軽率な行動はするべきではないだろう。

また日を改めて、誰かと一緒に何うのなら問題はないだろう。

「ごめんなさい。今日は用事があって……」

「そっか。じゃあ、また次の機会にでも」

水木は別に気にした様子もなく、あっさり話題を変えた。

自分の小さな嘘を全く疑わない様子に、灯の良心が咎める。

歩道橋の上を並んで歩きながら、「そうだ」と水木はポケットから携帯を取り出した。

「また都合の良いときに連絡して。これが、僕の携番とメアドだから、登録しておいてよ」

水木の手元を覗き込むと、シルバーの携帯画面に電話番号とメールアドレスが表示されている。

「――――先輩のデータを入力するくらいなら、別に問題ないよね？」

ひょっとしたら必要になるかもしれないけど、使うことになるのは限らないんだし。

「はい」

灯も自分の携帯を取り出すと、水木のアドレスを入力し始める。

真剣に打ち込み、『水木先輩』で登録ボタンを押したとき、突然首筋が熱く感じた。

パシッ！

次の瞬間、首筋を電流のような痺れが走り抜ける。

驚いて顔を上げると、やはり驚いた表情をした水木と目があった。

7、守りの力

「何、今の？ 静電気？」と水木が問う。

静電気？

似た感じだが、こんな強い静電気は経験したことがない。
くらりと目眩がした。
嫌な感じがする。

急に顔色が悪くなった灯の腕を、とっさに水木が支える。

「どうしたの？ 気分が悪い？」

水木の問いに、「……大丈夫です」と灯は小さな声で答えた。

「なんか顔色が悪いよ。僕の家、この近くだから、やっぱり休んで行きなよ」

水木はそのまま灯の手を取り、強引に自分の家に連れて行こうと、歩き出す。

灯は半ば引きずられるようになりながら、後について行かざるをえない。

「……………いいです。ホント大丈夫ですから」

確かに軽い貧血を起こしたような、気だるい感じがする。

今の変な現象のせいなのかもしれない。
あや妖かしが近くにいるのだろうか。

海風がない今、この場に妖かしが現れたら、水木まで巻きこん

でしまうことになる。

それが怖かった。

自分のことで、誰にも傷ついて欲しくない。

なのに、水木は怒ったような顔をして、灯の声など聞こえないかのように歩みを進める。

いつもの優しく穏やかな水木とは、人が違ったような強引さだった。

途方に暮れた灯りの制服の裾を、いきなり何かがグイッと引っ張った。

つんのめるようにして振り返ると、小さな女の子が両手で私のブレザーの裾を握りしめ、私を見上げていた。

小学校低学年くらいの子だろうか。

黒目がちの大きな瞳に、肩ぐらいの長さのさらさらした髪。

白いハイウエストのワンピース。

じっと見つめる瞳に、灯はどこか見覚えがある気がした。

でも、思い出せない。

「誰？」

水木も気がついて灯に尋ねる。

「え……と……私の近所の子……？」

自信なげに呟くと、女の子は嬉しそうにコクコクと頷いた。

そうか。近所で何気なく見かけたのかもしれない。

そうでなければ、こんな幼い子と顔を合わせる機会はないように思う。

灯はしゃがんで、女の子と目線を合わせた。

「どうしたの？ 道に迷ったの？」

不安がらせないように、微笑みながら尋ねると、女の子はコクリと頷いた。

「水木先輩。やっぱり今日は真っ直ぐ帰ります。私、大丈夫ですし、小さい子を放っておけないですから」

水木はまだ心配な様子だったが、不承不承ながらも納得して、歩道橋を下りたところで別れた。

ふと女の子を見下ろすと、怖ず怖ずと手を差し出してくる。

灯がキュッと手を繋いでやると、女の子はニッコリと笑った。

帰り道、灯はその子に色々話しかけたが、コクリと頷くと「YES」、ふるふると首を振ると「NO」だとわかるくらい少女は無口で大人しい性格らしかった。

どうやら「しおり」という名前であること。
7才であること。

ようやく分かったことはそのくらいだったが、灯の手を離さないこと、時々はにかんだような笑顔を見せることから、好かれているらしいことは伝わってくる。

人と話すときは専ら聞き役の灯が、一方的にしゃべるという、普段では考えられない不思議なシチュエーション。

おまけに10才も年下という日頃接することがないような相手ではあったが、その割には楽しく、なごやかに時間が過ぎ、気づけばいつのまにか灯の自宅近くまで帰って来ていた。

すると少女は、ようやく自分の家がわかったからか、ペコリと頭を下げると、タッタタッタと駆け出した。

「しおりちゃん、おうち分かったの？　大丈夫？　気をつけて帰るんだよ」

灯が声をかけると、少女はくるりと振り返り、ニコリと笑うと手を振った。

かわいいなあ。

私も妹か弟が欲しかったなあ。

そんなことを考え、微笑みながら自宅の門をくぐる。

視線を感じふと目を上げると、玄関脇の檜の木の中枝に、海風が座り、灯を見下ろしていた。

「おかえり。灯ちゃん」

幾度かの体育の授業で海風の運動神経の良さは知れ渡ってしまっただけ、今日も放課後、灯が教室を出るときには勧誘のための運動部員に取り囲まれていたようだった。

でも、園芸の手伝いをしたり、迷子の小学生の歩幅に合わせて歩いたりして、海風の方が帰宅が早いということになったようだ。

「ただいま」

しおりとの道中が楽しかったことが、無意識に灯の表情を明るくする。

そんな灯の前に、枝から飛び降りた海風がゆっくりと近づいてくる。

海風がむっとり難しい顔をしているのに気づいて、灯の顔からも笑顔が消えていった。

「水晶のお守り、見してくれる？」

灯が黙って、首筋の紐を引っ張ると、コロンと掌に透明な勾玉が躍り出た。

海風がそっと指先で触れる。

「やっぱり……気が歪んで、少々守りが綻びてるわ。何かあった？」

守りが綻びる？

思いつく原因は、先ほど水木と会った時に起こった静電気だ。

「帰る途中で……静電気みたいなのが起こって……」

「静電気？ いつものこと？ 誰か一緒やった？」

「……さっき……水木先輩と一緒にの時……」

とたんに海風の眉間の皺が深くなる。

ハアッと彼が深い溜息をつくとき、胸の深い部分でずきんと痛みを感じた。

「あいつと接触してる時に調子がおかしくなったのは2回目やろ？
なんでそんな無防備なんかな。大丈夫？ 気いつけなあかんやん
！」

大丈夫？ 気をつけて————。

それはさっき灯が小学生のしおりにかけた言葉と同じだった。

海風はまるで小学生に接するように、灯を扱う。

決して対等の相手として、灯を見てはくれないのだ。

そのことに突然気がついて、灯は深く傷ついた。

突然現れて命を救ってくれた。

「人工呼吸」とはいえ、ファーストキスを奪われた。

気にならないわけがない。

捻くれた言動に腹が立つこともあるが、将来の夢もしっかり持つて、家族からも同級生からも頼りにされている海風を尊敬していた。触発されて自立を夢見たりもした。

それによって、少しでも追いつければ良いと思っていた。だけど……。

幼少から家族に心配ばかりかけてきた自分だけど、卑屈にならねばならぬような生き方はしてこなかった。

周りの人に心配をかけても、迷惑をかけることはないように、出来る限り自分を律してきた。

精一杯。

そんな私の思いは、きっと彼には理解できないことなのだ。

「水木先輩はいい人だもん！」

思わず出た言葉の口調の強さに、灯自身が驚いた。

だが、怯まず、海風を真っ直ぐ見据えて、言葉が続ける。

「……自分の家から遠く離れて、私の学校に転校までしてくれて……海風くんには感謝している。でも……私も子供じゃないよ。海風くんと同じ高校生だよ。ちゃんと信用できる人とそうでない人の判断はしている。それで……私の判断が間違っていて……命を落とすような

ことになったら…それは私の自業自得、仕方がないと思うの」

「灯ちゃん？」

「私は、例えそちらの方が安全な一生であっても……人を疑ってばかりで、逃げてばかりの人生を送りたくない！」

グツと熱い物が喉の奥に込み上げる。

そのまま玄関に駆け出そうとした灯の手首を、海風がとっさにパツと掴んだ。

「灯ちゃん、ちょっと待ってえな！」

しかし驚いたように振り返った灯の瞳から、ポロリと涙が零れるのを見て海風の動きが止まった。

灯を掴む腕から急速に力が抜ける。

「ごめん。…ちょっと時間をちょうだい。…そしたら冷静に話を聞くから」

そして、いつも通り、笑えるようになるから———。

そう呟いて、小走りに玄関に消える後ろ姿を見て、海風は灯を傷つけてしまったことを察し、狼狽えた。

いつもおっとり笑っているから、危機感のない世間知らずのお嬢さんだと思った。

なのに———。

命を落とすことになっても、人を疑って、逃げてばかりの人生は過ごしたくないと言い切った灯の、真っ直ぐな瞳が脳裏から離れな

い。

守られるだけの、人形ではないのだ、彼女は。

キュツと唇を噛みしめる。

灯の涙を見て、なぜこんなに心が痛むのか――――。
その意味には、まだ思い至らない海風だった。

8、兄妹

灯の高校の図書室は新館の1階に位置している。

元々学校を休みがちで、友達とも知らず知らず距離を置いていたため、灯にとって図書室はお気に入りの場所だった。

蔵書も一高校の図書室としてはかなり充実しているし、話題の新刊なども早く手に入れられる事もあって、昼休みなど、よく利用していた。

水木のアドバイスから就職に興味を持った今は、欲しい資料も結構あることが分かって、これまで以上に足繁く、灯は図書室に足を運んでいた。

昼休みの図書室は利用者もまばらだ。

教室にはまだ冷房が入っておらず、初夏の日差しにじっとり汗ばむくらいだが、図書室は空調が効いており、過ごしやすい。

灯はいつものように、雑誌や新刊書籍を紹介する書棚をチェックしていく。

以前からベストセラー本や今話題の本が時々並べられていることには気づいていたが、進学や就職の情報誌もここに置いてあることに最近気づいたのだ。

何気なく表紙の字を目で追っていくうち、

『陰陽師 安倍晴明』

背表紙にそう書かれた単行本に気づいた。

手にしてパラパラとページを捲る。

—————安倍晴明って……海風くんのご先祖様だね……。

占いや呪術に優れ、人の目に見えない妖かしを見たというくだりを読み、実際海風はどんな力を持っているのだろうかと考える。

海風も灯には見えない、不可思議なものを見る。

灯に取り憑いた妖かしを、一瞬にして祓ってくれた。

灯に守りの力を施してくれた。

人間離れした力。

だが、何日か一緒に生活して、海風自身はごく普通の高校生だと思ふ。

しっかりしているようで、いやに子供っぽいところもある。

灯自身にも外見に似合わず、強情で負けず嫌いのところがある。

出会ってこの方、それらがぶつかってしまっ、どうも仲違いという結果になっているような気がする。

「本当は仲良くしたいのに。どうしてうまくいかないのかな……」

ホッと溜息をつき、灯は書籍を元の場所に戻した。

ふと目を上げると、テーブル席に最近親しくなった先輩の後ろ姿。両肘をテーブルにつき項垂れるようにして、掌の物を見つめていた。

その表情が何だかとても辛そうに見える。

いつも陽気な彼がどうしたのだろうと、灯は少し心配になった。

「水木先輩！」

図書室の中なので遠慮気味に、でも明るく声をかける。

ポンと背中を叩くと、ハッと顔を上げた水木と目があつた。

慌てたように水木が手の中の物を握りしめ、ポケットに突っ込む。

……石？」

チラリとしか見えなかったが、水木が見つめていた物は二つに割れた黒い石のように見えた。

水木の行動が、まるで灯の目からそれらを隠すかのようで、不思議に思ったが、敢えてその事には触れなかった。にっこり笑って、灯は水木に問いかける。

「先輩、なんか元気ないですね？ どうしたんですか？」

灯に顔を覗き込まれ、狼狽えた水木は、「いや…妹が……」と小さな声で呟いた。

「妹さん？ 先輩、妹さんがいらっしゃるんですか？」

灯の言葉に急に驚いたように目を見開いて、水木は自分の発した言葉を悔やむような表情をした。

「え…う、うん…」

「…妹さん、どうかしたんですか？」

「え！？…いや、その…ちょっと心配な事があった…」

「？」

「い、妹に…いや、妹が…その…夢中な相手が現れてさ」

水木は言いにくそうに、言葉を濁し目を逸らす。灯は水木を見下ろしながら首を傾げた。

「? ……彼氏さんができたって事ですか?」

「まあね。…それで、心配になってただけなんだ」

「そうなんですか。……水木先輩って妹さん思いなんですね」

クスリと笑う灯の表情に、水木も明らかにホッとした顔をした。

「心配だけど…どうしてやるのが良いのか、正しいのか、何だかわからなくなって……」

「……相手の方、何か問題でもあるんですか?」

「うん。…だけど…僕にはどうしようもなくてさ…」

水木は軽く頭を振り、それから気持ちを切り替えるように灯に柔らかい眼差しを向けた。

それは妹を思う優しい兄の表情に思えた。

「妹は今中3で、八神さんの一つ下なんだ。妹も大人しいけれど、芯はしっかりしていて…案外八神さんと気が合うかもしれないね」

「…妹さん、可愛くてたまらないって感じ。ちょっと羨ましいです」

「羨ましい?」

「ええ。私にも兄がいるんですけど、大学が遠いって、家を出て一人暮らししてるんです。最近はあまり会えなくて」

「そうか。…それは寂しいね」

灯が生まれつき身体が弱いせいで、いつも自分の身体の心配をしている優しい兄だ。

この春大学に合格したが、初めのうちは灯が心配だからと片道2時間かけて通学していた。だが、やはり無理があるということ、今は大学の近くに部屋を借り、下宿生活をしている。

海風が現在使用している部屋は、兄が以前使っていた部屋だった。

「でも、今は従兄弟がホームステイしているんだっけ？ 僕、なんだかいつも彼に睨まれているよ。彼も君の兄代わり？ それとも恋人？」

“従兄弟の彼”というのは海風のことだ。

学校関係者には、海風は従兄弟だと説明している。海風が転校してまで、灯の近くにいる本当の理由は、説明しても信じてもらえないから、簡単に家庭の事情で親戚の子を預かることになったという理由を通してしているのだ。

「恋人だなんて！ そんなことはないです！」

とんでもないというふうに、灯はブンブンと首を振る。

とたんに頬が熱を持った。

「海風くんが先輩を不快にさせたなら、ごめんなさい。ただ、彼は私を心配してくれてるだけなんです。私は…その、ちょっと身体が弱くて、よく倒れたりしてるし、何だかとても頼りなく思われてるようで」

自分で言って落ち込んでしまうのは何故だろう。

「…じゃあ彼はただのボディガードって訳？ それにしては、僕が八神さんに話しかけたら、まるで敵を見るみたいな視線を向けられるんだけど。…あれは嫉妬じゃないのかなあ」

「いえ、そんなことはないです」

灯はきっぱりと言い切った。

海風が敵を見るような目で水木を見ているなら、それは疑っているからだ。

水木に気を付けないといけない、無防備だと言われた事にカッとなって、人を疑って逃げてばかりの人生なんて送りたくない、海風の言葉を突っぱねたのは数日前の出来事だった。

「…そういえば、今日はもう一人の可愛いボディガードと一緒に帰るの？」

水木が話題を変えてくれたことに、灯は内心ホッとした。

このまま海風のことを考えていると、どんどん自分が落ち込んでしまいそうだ。

「たぶん…」

水木の言うもう一人のボディガードというのは、先日会った小学生の女の子の事だ。

すっかり懐かれたようで、あれから『しおり』と名乗った少女は毎日帰り道で灯を待っているようだった。

毎日のように帰り道で一緒になり、近所まで帰っている。

2度ほど、水木と帰りが一緒になり、就職の資料を見に、水木の家には寄らないかと誘われたが、自分を待っていたであろうしおりを一人で帰らせる訳にもいかず、断っていた。

申し訳なさそうに灯が言々と、水木は苦笑した。

「じゃあ、僕は帰る……まだ明るいし、大丈夫だとは思うけど、気を付けて帰ってね」

水木は立ち上がると、ポンポンと灯の頭を撫でて、踵を返す。灯は慌てて、その後ろ姿に、「さようなら」と声をかけた。

水木はその声に、ふと思いついたように、再び灯を振り返った

「それにしても、君は不思議な人だな。話していると、何だか素直な気持ちになって、……思わぬことまでしゃべってしまった」

水木の眼差しが優しく弧を描く。

そして、小さく首を竦めると、図書室を後にした。

灯は彼の様子になって、じつと遠ざかる後姿を見つめていた。

扉を開ける際にチラリと見えた水木の横顔は、何だか泣きそうに歪んで見えた。

9、襲撃（前書き）

9話には戦闘的シーンがあります。苦手な方は9話はスルーして下さいね。8話⇒10話でも、お話は繋がるようになっていきます。

9、襲撃

帰宅路に面した公園をヒョイと覗くと、ブランコに座っていたしおりと目があった。

少女は嬉しそうな笑みを浮かべ、灯の傍に駆け寄ってくる。思わず、灯も笑顔を返す。

端から見れば、年の離れた仲の良い姉妹に見えるかもしれない。そのまま、手を繋いでいつもの道を歩き出した。

しおりは無口で大人しい少女だ。

すっかり灯に慣れ、緊張しているような様子はないが、しおりから話をするのではない。

もっぱら灯が主に学校の事などを尋ねる。

しおりが頷いたり、首を振ったり、あるいはごくごく短い返事があったりで、何とかコミュニケーションが取れているような状態だ。だが、話が続かなくても気まずいような雰囲気はない。

むしろ繋いだ手の温もりが、灯には心地良かった。

いつものように歩道橋を並んでゆっくり上がっている時だった。しおりと手を繋いでいる反対側を、灯の脹ら脛を掠めるように、何かが駆け抜けていった。

とたんに背中をぞわりとしたものが走る。

急に辺りの色彩が色あせ、車が行き交う音が遠ざかったような気がした。

嫌な予感がして、繋いだしおりの手をギュッと握ると、しおりも縄のように握りかえしてきた。

歩道橋の階段は残り2段。

視線の先には反対側の階段へと歩道が延びているのが見える。その中央あたり、わずかに空気が歪んでいるようだ。

何かいる。

目には見えないが、殺気のような邪悪なものを放っている何か。蛇に睨まれた蛙のように呆然と前方を見つめて動けない。

次の瞬間グッと右手を引かれ、倒れ込むように膝とつくど、すぐ頭の上を風が唸りを上げながら過ぎていった。

「おねえちゃん……逃げるよ」

しおりが階段の下を睨むように見つめながら立ち上がる。

灯も反射的に立ち上がり、しおりに手を引かれるように歩道橋の反対側に向かって駆け出した。

必死で駆ける。

駆けながら、しおりがチラリと後ろを振り返ったようだった。

風が唸る。

しおりが繋いでいる手を離し、灯を歩道橋脇に突き飛ばすと、ちようど灯としおりの間の空気を裂くように何かが通り過ぎた。

「しおりちゃん……あなた……」

しおりには灯に見えない妖かしが見えているのだ。

小学校低学年の児童にしか見えないしおりが、灯よりはるかに俊敏に動ける事も驚きだった。

だけど、妖かしの目的は間違いなく私だ。

しおりは巻き添えを食ったにすぎない。

灯はふらりと立ち上がった。

足下を踏みしめるように前方を睨みつけているしおりを庇うようにして前に出る。

足が恐怖に震える。

だけど―――。

自分が生きているせいで、人に迷惑をかけたくない。
自分のために傷つく人は見たくない。

それが生まれて17年。灯のギリギリのプライドだった。

まして、しおりは自分よりもずっと幼い少女なのだ。

しおりは絶対に傷つけさせてはいけない。

たとえ、それで命を失うことになったとしても。

同じ時刻。

いつものように灯としおりを尾行していた海風は、灯たちが気づく前に異変に気づいていた。

明らかな妖気が行く手に感じられる。

見えない敵に警戒されないよう、灯とは数十メートルの間を開けて見守っていた。

危機を察し、反射的に駆け出す。

幼い少女と手を繋ぎ、何やら話しながら歩道橋の階段を上っていく灯の姿を捕らえたとき、黒い影が追いかけるように駆け上がり、灯の傍らを走り抜けた。

影が歩道橋の中程で振り返り、足を止めた。

妖かしの全身が見て取れる。

イノシシのような体躯。

鋭い両牙と真っ赤に濁った眼。

イノシシと明らかに異なるのはトカゲのような尾がある事と、眉間に第三の目があると言うことだ。

京都で古来から日本に住み着いている妖かしには慣れている海風だったが、それは今まで見たことのない輩やからだった。

発する妖気も半端ではない。

かなり手強い相手だと見て取れた。

やがて妖かしは、目標を灯に絞ってまっすぐ突進してきた。

立ちすくむ灯の手を、傍らの少女がグッと引いた。

倒れ込む灯のすぐ上を、妖かしが掠めるように過ぎていく。

イノシシに似ているだけあって、まっすぐ突進するだけで、攻撃の途中に微調整することはできないらしい。

妖かしが歩道橋の階段下に着地し、再度Uターンして階段を駆け上がるのを、十数メートル後を追いかけてながら、海風は懷から靈符を取り出し、呪しゅを唱えた。

妖かしに背を向け、懸命に逃げる二人だが、スピードではとてもかなわない。

再び妖かしが灯に踊りかかったが、それと気づいた少女が灯を突き飛ばし、からくもかわした。

その時。

呪しゅが完成し、海風の足下から風が巻き起こった。

方向を転換し、妖かしが再び灯に躍りかかろうとするのが見える。渦巻く風に刀印を下ろすと、風は唸りを上げながら妖かしに向かった。

かなりの破壊力を持つかまいたちの技わざは海風の得意技だった。

その目の前で、灯が少女を庇うように妖かしの前に立ちはだかる。海風の起こした風の通り道だった。

———あのバカ！

海風は心の中で舌打ちする。

「伏せろ！！」

海風の声に少女が反応した。

身を躍らせて、灯に覆い被さる。

縛れるように倒れた二人の上を掠めて、風が妖かしに襲いかかった。

「————！？」

灯の無事にホッとした次の瞬間、海風は背後に殺気を感じた。

だが、かわす間もなく、後頭部に熱い衝撃を受ける。

術を発動する間や直後は、他の攻撃に対し、どうしても無防備になる。

敵はそれを見越して、その弱点をついてきたのか。

相手は思った以上に、こちらの事を調べているのかもしれない。

だが、妖かしであれば、妖気を感じたはずだ。

————こいつは…人間！？

朦朧とする中、海風は振り返ろうとしたが、次に利き腕の右腕に焼け付くような痛みを感じ、そのまま意識が遠のいた。

一方——。

灯がしおりを庇おうと妖かしの前に出たとき、『伏せろ！！』と

叫ぶ声がした。

聞き覚えのある男の人の声だった。

「————海風くん!？」

あれは、彼の声に違いない。

助けに来てくれた。

嬉しくて、声のした方角を向こうとしたのだが、しおりが飛びついてきて、二人で纏れるように倒れ込んでしまった。

その直後、目を開けていられないくらい強い風が唸りを上げて頭上を通りすぎていったのだ。

灯が再び目を開けると、見上げる空も鮮やかな色彩を取り戻していた。

刺々しい空気が穏やかに変化している。

灯はゆっくり身を起こした。

「：しおりちゃん？」

二人で纏れ合うように倒れた筈なのに、しおりの姿が見あたらなかった。

嫌な汗が背中を滑り落ちる。

そうだ。海風くんは？

今、危機から救ってくれたのは海風に違いないのに。

振り返って、彼の姿が見えないこともおかしい。

「海風くん？」

灯は立ち上がると、不安な気持ちを抑えるように、歩道橋に戻る。

「海風くん!!」

歩道橋の端までたどり着いた灯が、下を見下ろすと、歩道橋の階段の袂たもとに、海風が倒れていた。

頭から首筋を赤い物が伝い、頭の下したの染みを大きくしていく。

「海風くんっ!!!」

彼はピクリとも動かない。

灯は跳ぶように歩道橋の階段を下り、海風に駆け寄った。

10、過去の傷

懐かしい京都の実家にある自分の部屋の光景だ。

薄暗い和室。畳に布団を敷いて横になっている。

ああ、いつもの夢だと安倍海風あべ・みかぜは思った。

この悪夢も灯あかりと暮らすようになってからは、何故か見ることはなかったのだが。

所詮、逃れられる物ではない、許される事ではないと言うことなのだ。

雨縁に面した障子がカラリと開けられ、明るい声が海風にかける。

『海風、おまえは熱があるんやさかい、今日は兄ちゃんに任せとき』

声の主は二つ違いの兄、安倍宇宙あべ・そらだ。

夢は3年前の出来事を繰り返す。

ダメだ。行ってはいけない。

そう言いたいのに、声が出ない。

現実として起こってしまったことは、もはやどんな技を駆使しても変えることは出来ないのだ。

『ほな、行ってチャツチャと片づけてくるから、おとなしゅう寝てるんやで』

そう言っっていつも障子は閉められる。

それは巧妙に張られた罠だった。
安倍家宗家の跡取りを陥れるための。

そして、誰より好きだった兄は、思いやりがあり家族親族の信頼の厚かった兄は、この後失われたのだ。

俺が熱など出さなければ付け込まれることもなかったと、――
そうやって無力だった自分を何年も責め続けてきた。

安倍の家にいるときは毎晩のように見た夢だ。

それはきつと兄が自分を恨んでいるからだ、許していないからだ、許される訳がないのだと自分に言い聞かせてきた。

だが――――、

切なくて、目を伏せようとしたら、急に障子に明るく日差しが差した。

和室の入り口で、兄は微笑んでいた。

そして、凜とした表情で海風を見て言った。

『――――惑わされるな。何が真実かお前なら見極められる。

そして、忘れたらあかんで。海風と大地みかせ だいちはいつでも俺の自慢の弟や』

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

ぼんやりと覚醒する。

白い天井が滲んで見えた。

無機質な蛍光灯の光がひどく眩しく感じる。

やはり夢だった。

だが、いつもと少し違う夢————前半はいつもの悪夢だったのに、最後の兄の言葉のシーンは初めて見た。

『———忘れたらあかんで。海風みかぜと大地だいちはいつでも俺の自慢の弟や』

眠りながら、泣いていたようだ。

涙を拭おうとして、腕が動かないことに気づいた。

右腕に温かさを感じて、海風は視線をそちらに向け、そして目を瞠る。

灯が添え木の当てられた右腕を抱きしめるようにして眠っていたのだ。

気づいたとたん、包まれた腕の暖かさに、気持ちまで抱きしめられた気がした。

灯の寝息の穏やかさに、何だかすごくホッとした。

同時に、一気に今日の出来事が頭に蘇ってくる。

いつものように灯を守るために尾行をしていて、妖かしに遭遇したのを思いだした。

妖かしを払いはしたが、その直後に背後から襲われたのだ。

『———惑わされるな。何が真実かお前なら見極められる』

そうだ。雑鬼に比べれば、高等な妖かしだったが、灯をつけ狙っていたヤツにしてはお粗末だった。

かなり獰猛な力をもった妖かしだったが、真っ直ぐ獲物に向かっ

ていくだけで、知性の欠片も感じられなかった。

あれはきつと囧おとしりだったのだ。

海風を誘い出すための。

術を発動している間は、全ての神経が術に注がれているため、他の注意が散漫になる。

そこを突いてきたのだとしたら、敵はかなり頭の切れるヤツだ。

海風が陰陽師だということも気づいてのことに違いない。

しかも相手は頭を狙って動きを封じた後、ご丁寧に利き腕を攻撃してきた。

これでは、右腕が使えない間、手印が結べない。

手印が結べなければ、陰陽道の術の発動にかなりの制限を受ける。

それに背後から襲われた時、海風は気配を直前まで感じなかった。術を発動中だったにしろ、妖かしであれば、きっと気づいたはずだ。

灯を狙う黒幕は妖かしにしろ、海風を襲ったのは人間だったのに違いない。

「……海風くん？」

起こしてしまったのか、灯が目を擦りながらそろりと顔を上げた。そして海風の頬を流れたものの跡に気づくと、はっと瞠目した。

「大丈夫？ どこか痛むの？」

海風の目尻に触れ、そっと溢れた物を拭おうとする。

それが何だか心地よくて、海風は小さく溜息をついた。

「大丈夫や。……ちょっとセンチメンタルな夢をみてしもただけや

さかい」

笑い飛ばしていつものように冗談にしておもうと思うのに、うまく笑えない。

ベッドの傍らに佇む灯の心配そうな顔を見て、海風は取り繕うのを諦めた。

「ここは？」

白い天井に壁。

見慣れない部屋の光景に、海風は訝しげな表情をする。

「病院。右上上腕骨にひびが入って、後頭部に鈍器で殴られた擦過傷を5針縫ったわ。他に検査で異常は発見されなかったけど、頭を打って意識が朦朧としているようだったから、念のため入院することになったの」

「そっか…」

「明日、MRIを撮って異常がなければ退院できるって」

灯は海風の固定された腕にそっと触れた。海風がチラリと彼女を見上げたが、俯いた表情は伺えなかった。

「ごめんね、私のせいで。……また助けてもらって。ホントにありがとう」

「うん。良かった、灯ちゃんが無事やって。今回、俺ドジ踏んで…もし灯ちゃんに何かあったら、悔やんでも悔やみきれないところやった」

「ううん。……私が悪い。いつも私のせいで周りの人が傷ついてしまうの。跡取りの海風くんをこんな目に合わせて、海風くんのお父さんやお母さんにも申し訳が立たないよ」

灯の口から零れてくる後ろ向きな言葉に何だか腹が立った。

彼女はいつも前向きで、直向きで。

進路のことにしても、絶望的な境遇でも諦めず、いつでも一筋の光に向かって歩いていった。

そんな彼女が好ましかった。

そして、気になって放っておけなかった。

「なんでそんなことゆうねん。これは灯ちゃんのせいやない。そんなこと考えもしてない。それに俺は跡取りといっても、所詮偽物の跡取りや」

「偽物？」

「……前に灯ちゃんのお母さんがゆうてたやろ？俺が一番陰陽の能力が高いから安倍家を継ぐと思ってたって。……そやけど、ほんまは違うんや。1才上の兄、安倍宇宙あべ・そらは数代に一人の星見と言われたくらい能力の高い陰陽師やった」

「星見って星占師のことだよな？」

「うん。陰陽師の仕事は妖かしを祓うだけやない。占術で、未来を予言したり失せ物を探したりもする。兄貴はその道に秀でてた。俺は兄には及ばなかった。本来安倍家を継ぐんは、俺の1才上の兄の筈やったんや。3年前のあの日まで……」

「3年前？」

「うん。3年前、妖かしを祓う依頼があつて俺の仕事の筈やったのに……俺、元々妖かしの調伏だけは得意で、兄貴に負けない自負があつたんや。でも、その日俺は熱が出て寝込んでしもて。で……兄貴が代わりに出かけて、罨にかかつて、壊された」

「え？」

「発見されたとき、兄貴の精神は壊されとつた。犯人はわからんまや。今も安倍の家の離れで母が面倒見てるけど……生ける屍とは今の兄貴のことや。ほんまはそうなってたんは俺の筈やったのに」

「……海風くん」

ベッドに横たわり、驚いたような灯の表情に目を眇める。

俺何やってるんだ？

なんでこんな話を、ペラペラとこの少女に話しているんだろう。

今まで誰にも打ち明けたことがなく、誰も触れない安倍家の醜聞。ただ、自分を責めている灯の気持ちを少しでも軽くしてやりたかった。

自分を責める苦しさは、誰より海風自身が分かっていたから。

「だけど、兄貴は生きている。将来ひょっとしたら、正氣に戻るかもしれない。そしたら安倍家は兄貴が継ぐ。俺はそれまで兄貴と阿部家を守らなあかん。そやのに、これくらいの事で隙を突かれるなんて……自分的には許されんことやねん。俺もまだまだやっちゅうことや」

両親も弟も一族の者も、誰一人宇宙のことで海風を責める者はいなかった。

口を揃えて、あれは事故だったと言う。

だけど、誰からも責められない分、海風は自分を責めてきた。

灯の件で壬生家から相談を受けたときも、興味はなかった。

京都を離れ、安倍家を離れる気持ちは全くなかった。

もう誰も、大切な人を失いたくない。

自分が京都を離れている間に、再び宇宙に起こったようなことが身内に起これば、きっと耐えられないだろうと思った。

なのに、話を受けることになったのは、父と3才下の弟に強く勧められたからだ。

強引に説き伏せられたと言っても良い。

3年前の事件の後、海風は後悔と責任の重圧の中、張りつめた生活を送っていた。

兄が無事でいれば当然したであろう活躍以上のことを自分に強いた。

わざと自分を追い詰めることでしか、自分自身を許せなかった。

それが結果として、陰陽師としての海風の技量を、格段に高めたのは事実だ。

だが、家族はそんな海風に危機感を抱いていたのだろう。

灯の話が舞い込むと、これ幸いに、海風に“安倍”から距離を置かせたのだ。

「そやから：俺に『申し訳ない』なんて言わんとして。それより、今度こそ俺にちゃんと守らせて。もう俺が後悔せんでええように」

真摯な海風の眼差しに、灯は思わずコクンと素直に頷いていた。

ホッとしたような微笑が、海風の表情に浮かんだ。

「それに今更俺に手を引けゆうても、手遅れや。奪われて平気でいられるには、灯ちゃんは俺にとって身近な存在になりすぎたわ。灯ちゃんも覚悟決めてえや。俺にとことん付き合うって。俺のこと信じるって」

少し傲慢だけど、優しさに満ちた物言いが、いかにも海風らしくて。

「海風くんの性格はともかく、言葉を疑ったことないよ。海風くんが『守る』と言ったら、どんなことがあっても、きつと守ってくれろと信じてるよ」

灯の言葉に、海風は一瞬驚いたような顔をして、それからクツクツと笑い出した。

目を合わせた灯もクスクス笑った。

海風の人間性を疑いこそすれ、海風が灯を救おうとする気持ちを疑ったことはない。

「灯ちゃんが俺と話するとき、敬語でなくなったんも、なんか嬉しい。たまに話しかけられても、なんかずつと敬語やったもんな。俺への警戒心が言葉遣いに表れてるんやろなって思っと思った」

「うん。……そうかも」

そう言って、また二人はクスクス笑い合った。

今なら、海風の人間性も誤解していたのだと分かる。

『前の学校で辛いことがあって…』と言ってた海風の言葉は嘘では

なかった。

『灯ちゃんこそ、気いづけな。……ホント騙されやすい性格みたいやし……』という言葉も自分を見下してではなく、本当に心配して出た言葉だったのだろう。

年齢に見合わないような辛い思いをしてきた分、複雑な人なのだ。本当は生真面目で優しいくせに、照れ屋で人一倍不器用で。

ここ数日、海風に対して抱いていたモヤモヤした気持ちだが、スツと晴れ渡っていく。

「ところで、今何時？」

突然海風に時間を聞かれて、「10時過ぎだけど……」と答えると、「それって夜の10時やな？ 窓の外真っ暗やし」と急に彼が慌てた様子になる。

「すっかり遅なってしもたな……誰か家の人おる？ 迎えに来てもらえる？」

すまなそうな海風の言葉に、灯は苦笑した。

灯の両親も面会時間が終わるつい1時間ほど前まで、この病室にいたのだ。

灯の身に何が起ったか、両親はすんなり信じてくれて、自分を助けようとして怪我をした海風の傍にいたいという灯の気持ちを汲んでくれた。

そこには何度も妖かしに狙われる娘にとって、例え万全ではなくとも海風の傍が一番安全だろうという配慮もあった。

「…大丈夫。今夜は付きそうつもりだし。そのために病室も個室に
してもらって、簡易ベッドも用意してもらったんだもの。両親の許
可も得てるから心配しないで。…それよりちよつと腕をかしてくれ
る？」

灯はベッドの傍のパイプ椅子に座り直すと、両手を翳すように海
風の右上腕部に触れた。

「『手当』って言葉があるでしょう？ 昔の人は怪我をした時、こ
うやって早く治るように念じながら手を翳したところから『手当』
って言葉はできたんだって。気休めかもしれないけど、私の家族は
私がこうしてあげると痛みが和らいで、早く良くなる気がするって
言うわ。私ってこのくらいの事しかできないから…」

「そんなこと、ないで。灯ちゃんは自分では気づいてないだけで、
たくさんものを周りに与えていると思うよ。灯ちゃんこうして
話してるだけで、なんか穏やかで幸せな気分になる」

———なんか穏やかで幸せな気分になる。

海風の言葉を聞いた瞬間、ポツと頬が熱を持った。

海風は聞いていて恥ずかしくなるような事も、平気で言葉にする。
本人は全然自覚していないようだが。

灯は慌てて、話題を変えた。

「————腕、痛む？」

「ん？…、そう言えばほとんど痛みを感じへんなあ。『手当』が効
いてるんかも」

大事なものを扱うように、そっと腕に触れる灯の温もりが心地良い。

怪我は職業柄日常茶飯事で、慣れている。

骨折やひびも、今まで何度か経験があるが、今回は今までになく痛みを感じない。

何だか患部がポカポカと熱を帯びている気がする。

気分がリラックスすると、再び眠気が訪れてくるようだ。

その後、灯は海風のベッドと平行に簡易ベッドを整えた。

穏やかな気分で、それぞれのベッドに横になりながら、眠りにつくまでポツリポツリとお互いの話をする。

灯は海風と知り合う前の自分の生活を。

海風は京都の安倍家での生活を。

海風は、病弱だった頃の灯の^{あかり}大して面白味のない話を興味深そうに耳を傾けて。

「灯ちゃんとうちやって話したいってずっと思ってた。変に仲違いみたいなことになってばかりやったから」

そんな海風の言葉に。

海風も自分と同じ気持ちだったことを知って、灯は嬉しかった。

11、秘められた力

翌日は朝から脳のMRI検査をし、後頭部の傷口を消毒し、再度腕のレントゲン写真を撮った。

お昼前には退院の許可が出たので、家に連絡したところ、すぐに灯の母親が迎えに来てくれた。

一晩だけの入院だったので、退院の支度といっても荷物もほとんどない。

それでも、一通り病室を片づけていると、海風の主治医だった先生がにこやかに現れた。

保護者の方に少し別室で話したいと言うので、灯と海風は一足先に預かったお金で入院の支払いを済ませ、駐車場に止めていた車の中で医者と話をしている母を待った。

「先生、何の話なのかな？」と灯が心配顔で聞くと、

「今日の検査の結果についてやる？ まあ、すぐ退院させてくれるんやから、特に異常もなかったと思うけど。それと、今後の通院についての話やろなあ」と、海風がさらりと答える。

なるほど。

上腕部の怪我については全治3週間との診断だった。今はギブスで固定されている。

頭の傷は縫っているので、包帯が巻かれている。抜糸するまでは傷口の消毒も必要だ。

しばらくは通院せざるを得ないだろうと、灯は思った。

「まあ、今はこんな腕やから、せめてギブスがとれるまでは、灯ちゃんも行動は慎重にして、できるだけ俺から離れんとして。今回の

敵は妖かしばかりやない。どうも人間が絡んでいるからやつかいや」

「え？ 誰が？」

「誰か分からんけど、俺を背後から襲ったヤツは人間に間違えない。そうじゃなかったら、気配を読み誤るなんて考えられへん」

「……」

「人間ってヤツは、ある面妖かしよりたちが悪い。俺の兄貴を陥れた事件も人間が絡んどった」

「……」

「そやから、灯ちゃん一人で黙って行動するのは厳禁な！」

コクリと頷いてから、ふとしおりを思い出した。

そう言えば彼女はあれからどうしたのだろう。

昨日は歩道橋の下で倒れている海風を見つけて、灯はパニックになった。

慌てて自宅に連絡をし、救急車を呼んだりしてるうちに、しおりがいないことに気づいてはいたが、救急車に付き添いで乗らなければならなかったし、探す時間もなかった。

小学生ながらも取り込んだ様子を感じて黙って帰ったのかもしれないが、灯はしおりに巻き込んでしまったお詫びも、庇ってもらったお礼も言っていない。

今日も灯を公園で灯を待っているんじゃないだろうか――。

海風に視線を移すと、まだ疲れがあるようで、瞼を閉じ、シート

にもたれている。

まだ本調子ではない海風に、心配をかけるわけにはいかない。そうかといって、しおりが自分を待っているのではないかと思いつながら、時間を過ごすのはやりきれない。

しかも、しおりはまだ小学生なのだ。

学校が終わるくらいの時間に、公園にしおりが来ていないか確かめるだけでいい。

いたら昨日のお礼とお詫びだけ言って別れば良い。いなければ、速効帰ってこよう。

ほんのちょっとだけなら――――。

その時。

2度も怖い思いはしたはずだが、見鬼けんきの才がなく妖かしが見えない灯には、海風が持つほどの危機感はなかったのだった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

退院して灯あかりの家に戻った時には、3時半になっていた。

朝から検査続きでさすがに疲れた海風みかぜは、自分の部屋になっている部屋のベッドに横になっていると、軽くノックした後、灯の母がそっと部屋に入ってきた。

「海風くん、ごめんね。灯に内緒でちょっとお話したくて」

驚いて身体を起こし、ベッドに座り直した海風に、灯の母は傷の具合を尋ねてきた。

「あ、大丈夫です。何か全然痛みもないですし。心配かけてすみませんでした」

「そう、それは良かったわ。……こちらこそ灯を守ってくれてありがとう」

言葉とは裏腹に難しい顔をして、灯の母は何か考え込んでいるようだった。

「医者が…なんか言っていました？」

不安になった海風が尋ねると、灯の母も真剣な顔をして話し出した。

「昨夜、病院に灯も泊まり込んだでしょう？ 何かなかったかしら？」

「何かって？ …別に色々話はしたけど…ああ、そう言えば灯ちゃんに『手当』をしてもらったかな」

「手当？」

「はい。なんでも早く治るように念じながら患部に手を翳してくれてました。気休めかもしれないけど、そうすると痛みが和らいで早く治る気がするって家族にも好評だからって」

「そう…。確かに誰かが怪我をすると灯はよくそうしてくれて…み

んな『痛みが和らいだ気がする』『早く治った気がする』って言うてたけど……。でも、その時は実際に医者にかかっていた訳ではなかったから、気持ちの問題だと思っていたの。でも、今日、海風くんの主治医の先生に話を聞いて、びっくりしてしまっ……」

「どういふことですか？」

「右上腕骨のヒビ、昨日のレントゲンでは全治3週間の診断だったでしょう？　それが今朝のレントゲン撮影ではほとんど完治している状態だって、先生が言うの。お医者様もびっくりしていて、何度も昨日と今日のレントゲンを見比べて、信じられないことですがとおっしゃって……」

「……」

常識的には考えられないことだろう。

だが、海風は心のどこかで納得していた。

『彼女の手にかかるどんな植物も生き生きと育つ。……それでも彼女が何だか魔法でも使ってるかのように感じる時があるよ』

園芸部顧問の竹山は、灯を評してそう言った。

なぜ灯の手にかかるるとどんな植物でも生き生きと育つのか。

なぜ灯は生まれてからずっと、妖かしに異常につけ狙われるのか。灯は100年に一度という位霊力の高かった祖母を持つ。

そして、一晩で海風の怪我を癒したこと。

頭の中で全ては一つの結論に繋がっていく。

「海風くんの治療は後頭部の傷口の消毒に数日通って、一週間後に

抜糸。右上腕骨も抜糸の時、レントゲンを撮って完治していたら、通院終了だそうよ。学校に提出する診断書も全治3週間とあったのを訂正しようかと言われて……」

「いえ。それはそのまま3週間のままにしといた方がええと思います」

「私も、一応海風くんに相談してからと思ったものだから、返事は保留してるんだけど」

「敵は：俺が負傷したと思ってます。だったら油断させたままの方がええと思うんです。何から敵に情報が漏れるかわかりませんから」

「わかったわ、海風くん。：ねえ、やっぱり灯は……」

二人の真剣な眼差しが交差した。

海風は一言一言、自分の考えをまとめるように話し出した。

「たぶん：かなり高い霊力を秘めているんだと思います。ただ、表面に出る力ではなかったために、今まで誰も……本人すら気がつかなかったんや。灯ちゃんの力は癒し、あるいは能力を高めるような働きがあるんやと思います。人間は気づかなくても、妖かしにはそれが分かっていて：だから灯ちゃんはずっとヤツらに憑かれてたんや」

それはまさしく『寄生』だったのだ。

潜在的に高い霊力を持っても、始終妖かしに奪われて、慢性的に貧血のような状態だったのだろう。

科学的な検査では原因が分からなかったため、灯はずっと『虚弱体質』で片づけられていた。

問題は、今灯をつけ狙っているヤツが、単に『寄生』で満足せず、命ごと力を奪おうとしている可能性があることだ。

「とにかく、敵が俺を負傷していると見なしている今、灯ちゃんは非常に危険だということです。この機会を逃してくるとは思えませんが」

その時、机の前の壁に貼り付けられていた人型の紙人形が、ひとりでにカサカサ音を立てて揺れた。

ムツとした表情で、海風はそれに一瞥をくるとベッドから立ち上がり、灯の母に視線を向けた。

「灯ちゃんは、今どこに？」

「え？ 自分の部屋にいたと思っていただけ」

「ということは、おばさんにも内緒で出かけたということか……」

海風は大きく一つ溜息を溢すと、机の上に置かれた黒塗りの箱から、数枚の呪符を取り出した。

ジャケットを羽織って、その内ポケットに、丁寧に呪符をしまう。

「ホント、本人がその危険をちゃんと自覚してくれたら、ええんですけど……どうやら無鉄砲なところは、いくら言いきかせても治らんみたいやなあ————」

ニヤツと笑みを浮かべると、海風は驚いた表情の灯の母に背を向け、さっさと部屋を出て行った。

「灯に何かあったの？　でも、海風くん、あなた、まだ体が本調子じゃ——」

我に返った母親が海風を追って玄関を飛び出したが、すでに海風の姿はどこにもなかったのだった——。

12、謎の少女

海風が灯の異変に気付く少し前のこと――。

こっそり家を抜け出した灯は、いつもしおりと出会う公園に向かっていた。

今からだとちょうど下校時だ。

公園をちよつと覗いて、しおりがいなければそれでいい。

まっすぐ帰ってくれば良いのだ。

怪我をして弱っている海風を煩わせるまでもない。

息を切らせて、公園にたどり着き、ぐるりと辺りを見回したが、人の姿はなかった。

誰もいない滑り台やブランコを眺め、ホッと笑顔が漏れる。

その時、不意にかけられた声にビクリとした。

「八神灯さん：でしょう？」

振り向くと黒いストレートヘアを背中まで流し、美少女としか形容できない少女が微笑んでいた。

白いセーラー服はお嬢様学校で有名な女子校の制服だ。

ただもう初夏といって良いくらいの陽気なのに、少女が着ているのは長袖の冬服で、白い手袋まではめている。

不思議なことに、汗一つかいていない。

「私は水木小夜^{みづき・さよ}。兄から聞いて：あなたの事はよく知っています」

くすりと笑いながら、小夜は灯に一步一步ゆっくり近づいて来る

「兄から？ ひよっとしたら…水木先輩の妹さん？」

「ええ。不肖の兄がいつもお世話になってるそうですね。お願いしていたのに…兄ったら、ちっともあなたを家に連れてきてくれないんですもの。……一度ゆっくりお話ししたいと思っていましたのに」

灯は小夜の顔から視線を外せなかった。

黒目がちの大きな瞳に、ピンクのふっくらとした唇。

芸能人だと言われても納得してしまうような整った顔に終始笑みが浮かんでいるが、灯は思わず後ずさりしたくなった。

「『不肖の』って、そんなことないです。…水木先輩はしっかりしているし、優しいし。私が妹なら、自慢のお兄さんだと思うけど」

「あの人は…中途半端に甘い。あのお方のおっしゃることだけ、守っていれば良いのに。変にあなたの肩を持ったりするから、ご不興を買ったりするんだわ」

「……甘いって…ご不興を買うってどういうこと？」

小夜の言葉の意味が分からない。

灯が金縛りにあったように、呆然と動けないでいるうちに、小夜は手を伸ばせば触れられるくらいの距離まで近づいてきた。

「兄のことなんか気にしなくて良いの。あなたも私も、あのお方に見いだしていただいた、選ばれた人間なのよ。私の身も心も、あのお方のもの。私は、あのお方に私の全てを捧げられるのが幸せで仕方がないの。あなたにもすぐに私の気持ちが分かるようになるわ――」

小夜の瞳に魅入られたように視線を逸らせられない。

小夜の言葉がまるで意味の分からない呪文であったかのように、思考がボウツとして何も考えられなくなる。

小夜の顔が近づく。

肩に手の重み。

吐息が肌に触れる。

「ちょっと味見させてね」

そんな声が聞こえた次の瞬間、灯は唇に熱を感じた。

————キスをされている。それも、女の人に。

驚愕に目を瞪る。

身体が竦んで動けない。

だが、小夜は軽く触れただけで、すぐに唇を離し、「甘いわ」と言ってクスリと笑うと、自分の唇をペロリと舌で舐めた。

それから冷たい小柄な手で、灯の手をギュッと握った。

「ね、今から私の家に行きましょうよ。あのお方も待っていていらっしゃるわ。あなたもきつと喜んでくれるはずよ」

「————いいえ!!」

手を振りほどこうとしてもほどけない。

目の前の少女は、穏やかな水木志樹と兄妹とはとても思えなかった。

きれいには違いないが、普通ではない。

ただただ怖い————そんな感情に身が竦んだ。

「今日はすぐに帰らないといけないの。待ってるかもしれない心配してた人もいないし、…とにかく今日は帰るわ」

「ダメよ。日が経てば経つほど、邪魔が入る。あのお方はそんなに気が長くないの」

「――あのお方って？」

「素晴らしい方よ。あのお方の役にたてるなんて、あなたって本当に幸せよ」

小夜の無邪気そうな笑顔に、ゾクツと背中を冷たい汗が滑り落ちた。

頭の中で警鐘が鳴り響く。

「嫌っ。今日は帰りたいの。また日を改めて、お邪魔するわ」

「あら、あなたに拒否権はないのよ。それに私の兄が少しでも哀れだと思うなら、いらっしゃらないと後悔することになるわ」

「水木先輩が…哀れって、どういうこと？」

「兄ったら、身の程知らずにも、あなたを見逃してくれるようにって、あのお方に懇願したの。もちろん、あのお方はお怒りになったわ。あなたのせいで――」

水木とは、昨日の昼休み、学校の図書館で会ったのが最後だ。彼はしきりに妹のことを心配していた。

何か思い詰めているような、いつもと違った様子だった。

『まだ明るいし、大丈夫だとは思うけど…気を付けて帰ってね——』

そう灯に労りの言葉をかけながら、なぜか泣きそうな顔をしていた。

あの後、灯と海風が襲われたように、水木の身にも何事か起こったのだろうか。

グイッと手を引かれて、灯は大きくよろめいた。

捕まれた手から、徐々に体温が奪われていくような気がする。

だんだん考えることが億劫になっていく。

ね。だからあなたは来なければならぬわ。あなたが来れば、あなたのお方もきつと兄を許すでしょうし、あなたにとっても名誉なことだもの……」

その時、パシンと乾いた音と共に、第三者によって手が振りほどかれた。

小柄な人影が小夜と灯の間に割って入る。

「…しおりちゃん————」

灯が恐怖に竦んだ相手を、しおりは臆せず睨みつけていた。

「おねえちゃん…だいじょうぶ？」

チラリと視線を向けて労るしおりの様子に、灯はコクンと頷くことで返事を返した。

何だか身体に力が入らない。

「まあ。式の分際^{しき}で生意気なこと。また、邪魔をしようというの？」

小夜の表情から笑みが消え、しおりを睨み返す。

だが、灯の意識の全ては、今聞いた小夜の言葉に集中していた。

式の分際————？

小夜の言葉がしおりに向けられていることに気づき愕然とする。

「ひょっとしたら、あなたの主人も近くにいるということなのかしら……。いいわ。今日は諦めるわ。でも、八神灯さん。……近うち、あなたはきつと来ることになる」

小夜は再び余裕の笑みを取り戻すと、すれ違いざま、灯の耳元に唇を寄せた。

「それも、一人で。……でないと————」

声は小さかったが、それでもかろうじて聞き取れた。

小夜が遠くなるにつれて、恐怖が遠ざかり、思考が元に戻ってきた。

緊張が解けてホッと体中から力が抜けた瞬間、「灯ちゃん……」と声がした。

クラリとふらついた身体を、誰かが力強く支えてくれる。

視線を向けると、心配そうな海風の顔。

それを見たたん、灯の瞳から急に涙が溢れた。

「や、もう大丈夫やから。灯ちゃん、……泣かんといてえな」

仰天した海風がオロオロと慰めるが、堰を切ったようにポロポロと灯の涙は止まらなかった。

一つ年下の少女相手に、なぜあんなに緊張したのか、なぜあんなに恐怖を感じたのか分からない。

ただ海風の顔を見たたん、すごく安心したのだ。

海風もその様子に、しばらくは気の済むまで泣かせてあげようと、そっと灯の背中を怪我をしていない左腕で包み込んだ。

灯の頭を自分の肩に凭せかけると、灯の嗚咽に合わせるように、背中をポンポンと優しく叩く。

やがて気持ちが落ち着いてくると、灯にも周りの音を氣にとめる余裕が戻ってきた。

まだ、時刻も夕方近くの児童公園である。

海風の肩に顔を埋めている状況では視界はきかないが、人通りが全くないわけではないことは察せられた。

海風は相変わらず、優しく背中を撫でてくれている。

それは心地よいものだったが、同時に灯は海風との距離の異常な近さを自覚した。

恥ずかしさに頬を染めて、そっと離れる。

ふと視線を上げると、海風が見たこともないような優しい目をして、灯をじっと見つめていて――。

キュンと胸の奥に、経験したことがない切ない痛みを感じた。

「もう大丈夫？」

「う、うん。ごめんね。海風くんの顔を見たら、ホッとして涙が止まらなくなっちゃって」

灯が涙の残骸を自分の指先でそっと拭う。

潤んだ瞳で微笑みかけられると、海風も平静な心持ちではいられなくなる。

頬が熱を持つのを、コホンと空咳で誤魔化した。

灯を間に、海風としおりと三人でゆっくりと家路を辿る。

「良かった、何もなくて。ホント灯ちゃんといると俺の寿命が縮むわ」

「ごめんね。海風くんには一人で行動したらダメだって注意されたのに……」

「まあな。でも、この行動も予想の範囲内やったから。でも、俺も悪かった。紫苑の事を内緒にしてたし」

「しおりちゃんって……紫苑さんだったの？」

「……うん」

「そうだったんだ……」

“しおり”こと“紫苑”が心配そうな表情で灯を見上げていた。安心させたくて、灯はニコツと微笑みかけた。紫苑も小さく微笑み返す。

しおりが紫苑だと分かったと、今まで不思議に思っていたことが納得できた。

見鬼けんきだったこと。

近所に住んでいるような様子で、ずっと守るように、灯を家の前まで一緒に帰ってくれたこと。

小学生とは思えない敏捷な動作で助けてくれたこと。

だけど――、

寡黙な少女が慕ってくれることが何だか嬉しかったのに。

兄しか知らない自分に、妹という庇護する対象ができたような気がして。

だけど、本当は主人に命じられて自分の前に現れただけだったのだと分かったと、悲しかった。

海風にはそんな灯の心情がすぐに分かっってしまうようだった。

「違うで。灯ちゃんの傍にいたいって、紫苑から言い出したんやから。俺が強制した訳ちゃうで。紫苑は式神や。ただの式とは違って自分の意思を持ってる。灯ちゃんの傍におったのは、紫苑が灯ちゃんを慕ってるから：理由はそれだけや」

「…ホント？」

灯の問いかける視線に、紫苑がコクリと頷く。

「そうそう。だいたい式神っちゅうんは字の通り神の眷属けんぞくやから、紫苑に限らずプライドが高いんや。納得せえへん命令なんて聞く耳持てへん」

灯の表情がみるみる明るくなった。

本当に分かりやすいと、海風は思う。

灯のその素直さ、分かりやすさが出会った頃は、心配の種だったのだが、今はむしろ好ましい。

ずっとこのままできて欲しい、変わらぬように守りたいと思う。

「…ホント二人とも、ごめんなさい。また勝手に動いて、心配かけて…」

「灯ちゃんって、自分のことならそうでもないのに、他の人のためやったら無茶することがあるやろ？ だから、性格上、毎日下校時に会おう女の子のこと、放っておかれへんやろなって思った。で、注意してたんや。前もって紫苑のこと、言っといたら良かったんかもしれへんけど、灯ちゃんはすぐに顔や態度に出るし。それはそれで賭みたいなものやから躊躇ってしもた。こっちこそ、ごめん」

顔や態度に出ると言われれば、否定できない気がする。

でも、海風が自分を対等に思ってくれているのが、今は言葉や態度から伺えて、灯は嬉しかった。

「じゃあ、おあいこね」と灯が笑えば、海風も「そやな」と微笑み返す。

「ただ敵は俺の力のことも把握してるみたいや。負傷してる今を狙って、畳み込んでくる可能性が高い。だけど、俺や紫苑は絶対灯ちゃんを守るから。もっと信頼して、今日みたいに無茶なことはせんといて」

海風の真剣な表情に思わず、コクリと頷いてしまう。

それから、ふと小夜の言葉を思い出した。

『近いうち、あなたはきつと来ることになるわ。』

それも、一人で。……でないと大事な人を失うことになるわ――
――』

あれはどういう意味なのだろう。

水木志樹のことも心配だ。

まるで危害が加えられているような物言いだった。

でも、ある事実に気づいて愕然とし、小夜の言葉の意味を噛みしめたのは、帰宅して自分の部屋に戻ったときだった。

着替えようとして、何気なく首元に手を持って行ったとき、本来あるべきものがない事に気づいたのだ。

我が身を守るお守りに海風から預かって、それこそ肌身離さず身につけていた水晶の勾玉。

安倍家で代々受け継がれているような、とても大切な宝玉がない。灯は必死で心当たりを探したが、結局どこを探しても見つからなかったのだった。

13、迷い

「海風くん、まだ顔色が悪いわ。今日は学校へ行くのはダメよ。灯のことを心配してくれる気持ちは嬉しいけど、あなたに何かあっては元も子もないわ。安倍家に対しての責任もあります」

翌朝、登校の用意をしてダイニングに現れた海風の顔を見るなり、灯の母親はそう宣言した。

「俺のことやったら心配要りません。自分の体のことは自分が一番分かってますから」

「昨日退院したばかりで、無理をさせるわけにはいかないわ」

「……じゃあ、灯ちゃんも休むんやったら。敵がどう動くかわからんのに、今灯ちゃんと離れる訳にはいきません」

同時に海風と母親の視線を受けて、テーブルで食パンを食べていた灯は、思わず喉が詰まりそうになった。

「でも、今日休むわけにはいかないよ。ただでさえ欠席が多いし、今日は休めない授業もあるし」

それに、勾玉のお守りを探さなきゃいけないし、水木先輩の様子を確認しなくてはいけないし。

灯は、心の中でそっと付け足した。

やはり今日は休む訳にはいかない。

「せやけど、また命を狙われたらどないすんの？」

「その時はその時。こんな体質に生まれてきて、今までだって危ない目にあつたことは何度かあるもん。今さら、くよくよ心配しても仕方ないでしょ？」

「でも————」

灯は海風から母親に視線を移した。

「おかあさん、ずっと逃げてばかりはいられない。いつまでも海風くんに頼ってばかりはいられないでしょ？……海風くんはいずれ京都に帰らなきゃいけないんだから。だったら、私は体調の良い時ができるだけ学校に行きたい————」

「え？」

灯の言葉は海風にとって不意打ちだった。

そうだ。自分はいずれ京都に帰る。この事件が終わったら。

今までじっくり考えた事などなかったが、それは避けられない事実だった。

灯と離れ、気がかりな気持ちを抱えたまま、帰らなければならぬのだ、安倍の老家、あの闇の中へ。

「後悔したくないもん。どうせ今の危険から逃れても、またいつ危険な目に会うかわからない。だったら、海風くんがいるうちに私自身がちよつとでも強くならなくちゃ」

「そりゃあ、いつまでもうちに海風くんを引き止める訳にはいかないし、灯の気持ちも分かるけど。……でも、無茶はさせたくないわ」

海風は灯の隣に座ると、テーブルに用意された朝食に手をつけた。コーヒーを一口飲んで、灯に向き合った。

「ほんなら、灯ちゃん、二つ約束してくれる？　一つは登下校、紫苑を傍に置くこと」

「う、うん。わかった」

「それから――――」

海風は灯の髪を一房手に取ると、小さな声で真言を唱えながら、自分の額に押し当てる。

海風の柔らかな前髪が灯の頬を掠めて、その近さにトクンと灯の鼓動が跳ね上がった。

「……万一、危険な目に陥ったら、その時は俺の名を呼んで。――――」

「海風くんの名前を呼ぶ？　そしたら、どうなるの？」

「俺の名を呼んだら……いつでも、どこにいても、きっと俺の持つ陰陽の技を全て駆使して、灯ちゃんを守る。そやから、忘れんといて、絶対に」

反射的に灯はふるふると首を振った。

「でも、海風くん……一昨日も危ない目にあっただのに……私、これ以上私のせいで海風くんに危険な目にはあってほしくない」

「『私のせい』だけとちゃう。これは俺の自尊心の問題でもあるんや。俺は一度人生で掛替えないと思っっているものを奪われた。もう二度と繰り返したくない。……灯ちゃんをちゃんと守れたら……きつと俺も、もう一度頑張れる気がするんや」

二カッと笑って、瞳を覗き込まれると、それ以上何も言えない。

「うん。……ありがとう」

それが海風の本心なのか、灯を氣遣ったの言葉なのかは分からない。

でも、自分に対する温かな気持ちを感じて、灯はふわっと笑みを返した。

海風はそんな灯の様子を見つめながら、ちよつと意地悪そうな表情をした。

「ほな、ちよつと練習してみよか」

「え？ 練習？」

「そ。急に名前呼ぼうとしても、ど忘れしたりしたらあかんやろ？」

海風の意図を図りかねて、灯は目を瞠った。

「海風くん……でしょ？ 忘れたりしないよ」

「『くん』はいらへんよ。海風でええ」

「そんな……呼び捨てなんてできないよ。なんか……失礼だし」

「失礼なことなんてあらへん。むしろ……身近に感じられて嬉しいわ。それに、俺の真名は海風。余計なもの付けて、術がちゃんと発動しなかったら困るやろ？」

「術が発動しないなんて事があるの？」

「うん。そやから、ちゃんと呼んでみてえな。海風って」

「……み、みか……ぜ」

急に、顔に体の血液が集中するような気がした。
恥ずかしい。

「そう。ほら、もっぺん言ってみ？ 海風って」

「み、海風」

「なんか、気持ちこもってないなあ。もっぺんやり直し」

海風、海風、海風……。

そんなふうは何回か言わされているうちに、だんだん慣れてきた。

「その調子。忘れんといてな。灯————」

海風はずるいと、灯は思う。

こんな風に、突然隙をすいてくる。

急に呼び捨てにされて、さらにこれ以上ないくらい真っ赤になっ
てしまった顔を見られたくなって、灯は俯いた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

—————どうしよう……。

学校に到着し、下足室で上靴に履き替えながら、灯は途方に暮れていた。

海風との約束どおり紫苑を伴って、少し早めに家を出て、道中、無くした水晶のお守りを探した。

ひよっとしたら帰り道で落としたのかもしれない。

公園までの道を、丁寧に探したがお守りは見当たらなかった。

水晶の御守りを、灯は今までそれこそ肌身離さず、お風呂の中まで外さず、大切に持っていた。

退院した後も、海風に付き添って病院から家に戻り、軽くシャワーをしたときには確かに身につけていた記憶がある。

それから詩織の事が気掛かりで、公園に出かけた。

水木小夜に会い、海風と一緒に自宅に戻り、部屋着に着替えようとして紛失していることに気がついたのだ。

念のために、公園近くにある交番で拾得物がなかったか尋ねてみた。

そんな届け物はなかったけど、警察署にも尋ねておくよと年配のお巡りさんに言われ、素直に遺失物の書類を書いたが、あまり期待できないような雰囲気だった。

家にもなく、家から公園までの道中にもなかったとすると……ふと、灯の脳裏に水木小夜の冷たい笑顔が浮かんだ。

……ひよっとしたら、彼女が知っているかもしれない。

大きな溜息をつきそうになって、灯はふと周りを伺った。学校に到着する前、紫苑はいつの間にか姿を消していた。

小学生の姿の紫苑が、高校の構内に入るのは不自然だろう。

だけど、灯に見えないからといって、そこに紫苑がいないとは限らない。

初対面るとき、海風は姿の見えない紫苑と灯の前で会話していたではないか。

紫苑に心配させるような様子を見せたら、きっとその主である海風にも伝わるだろう。

せっかく二人の間の溝が埋まって、対等に親しく話すことができるようになったのに、その関係を崩すようなことはしたくなかった。心配をかけたくない。

呆れられたくない。

一昨日自分を助けようとして、怪我を負った海風の姿が脳裏から離れない。

いくら呼びかけてもなかなか意識を取り戻さない海風を抱きかかえてた。

裂傷からの血で両手が赤く染まる。

ひよっとしたらこのまま死んでしまうのではないかと。

あの時の恐怖。絶望。

もう二度と味わいたくなかった。

危ないときは、必ず海風の名を呼ぶと約束したけれど、

彼の名前を呼ぶ練習までしたけれど、

だけど、海風を失うくらいなら、

あの笑顔を二度と見られないくらいなら、

自分が失われた方がずっと楽な気がする――――。

始業のチャイムまでは、あと10分もなかったが、灯はそのまま2年生の教室棟にでかけた。

もう一つの気がかりをはっきりさせるために。

水木志樹の安否を確認するだけなら十分だろう。

「ああ、水木？ あいつ、ここ数日欠席してるよ。担任は風邪だとか言ってたけど。今日もまた休みじゃないのかなあ。いつも早いのに、まだ来ていないみたいだし」

ちょうど教室のドア近くにいた男子生徒に水木のことを尋ねると、すんなり彼の不在を教えてくれた。

風邪だという連絡も本当かどうか疑わしいものだ。

小夜は水木が灯を庇うような物言いをしたため、『あのお方』が激怒したと言っていた。

『あのお方』が誰なのかは分からないが、その人物を崇拝しているらしい小夜の様子は異常を通り越して、怖れを感じたほどだった。何か理解しがたい大変なことが水木に起こっているような気がした。

ひょっとしたら、水木は今、自由のない環境にあるのかもしれない。い。

酷い目に合ってなかったら良いけど、灯は思った。

「あの……。水木先輩の家、ご存じでないでしょうか？」

「家？ ああ、確か————」

人の良さそうな男子生徒はちよつと考える様子をしたが、

「ほら。隣町の高台に古びた西洋館があるの知ってる？ 何でも昔、
なんとかの公爵のお屋敷だったそうで、水木の両親が骨董好きでさ、
確かこの春に、その屋敷に一家で引っ越したとか言ってたなあ」

と、教えてくれた。

隣町の高台にある古びた西洋館なら、この辺りに住む者なら、誰
でも知っている。

もう何十年も空き家になっていて、子どもの間では「お化け屋敷」
などと呼ばれている廃れた屋敷だ。

『近いうち、あなたはきつと来ることになるわ。』

それも一人で……でないと大事な人を失うことになるわ———

』

小夜の言葉を思い出す。

『大事な人』というのは、水木志樹を指すのか、それとも———
——海風？

灯は男子学生にお礼を言うと、その足で保健室に行き、気分が悪
いからと虚偽の申告をして、帰宅の手続きをとると、学校を後にし
た。

14、対峙

長い坂道の果てに、水木の住む西洋館はあった。

新興住宅地から外れ、さらに竹林を左右に眺めながら、車一台がやっと通行できるだらだら坂を上っていくと、急に視界が開け、古い門柱が目に入る。

鉄柵の向こうに見えるのは、神戸の異人館通りにあるようなレンガ造りの壁に尖塔のある立派な邸宅だ。

だが、近頃水木一家が住んでいるという割りには、ほとんど手入れがなされていない、荒れ果てた印象を受けた。

門扉からエントランスに向けてのアプローチには伐採の跡もあり、石畳が夏の日差しを受けて白く輝いている。

だが、敷地内の木々も鬱蒼と生い茂っており、建物のレンガも多くは蔭で覆われている。

窓にも厚い鎧戸が下ろされたままだ。

屋根の上の風見鶏は錆付いているようで、風を受けてもビクリとも動かず、鈍い光を放っている。

長い間人に忘れ去られ、眠り続けてきた屋敷という印象を否めなかった。

本当にここに水木一家が住んでいるのだろうか。

ひよっとしたら、場所を勘違いしたのかもしれない。

錆付いた、しかし車2台は横幅があるかと思われる立派な鉄門の間から中の様子を探りながら、灯がそんなことを考えていたとき、突然、「ギ、ギ、ギ、ギ、ギ……」と音を立てながら門が開いた。

吃驚して、思わず数歩後ずさる。

じつと耳をすませても五月蠅いくらいのセミの鳴き声が聞こえるばかりだ。

だけど、自分を見ている誰かの視線を感じる。

灯は迷いを振り切るように、門の隙間に体を滑り込ませた。

「いらっしやい。お待ちしましたわ」

「!？」

ホツとするまもなく、かけられた言葉にギクリとする。

いつの間に現れたのか、目の前のエントランス脇に水木小夜が立っていた。

にっこり笑みを浮かべながら、一步一步灯の方に歩いてくる。

「私は……水木先輩がお休みされているって聞いて……」

ジリジリ後ずさるが、門扉に当たって、それ以上下がれなくなっ
た。

いつのまにか開いていた扉は閉まっている。

「兄の事を心配してここまで来て下さったの？ 本当に灯さんって
……お優しいのね」

小夜は目の前までやってくると、灯の手をとって、胸の前で握り
締めた。

「でも大丈夫。……兄ったら、確かに一時期あなたに味方して、あ
の方のご不興を買ったりしたけど、少しお置きされたら、すっか
り心を入れ替えたの。今は従順なしもべとなってるわ」

「え？」

「でも、元々それが兄の役回り。ご存知かしら、兄はあのお方の命令であなたに近付いたのよ。黒水晶にあなたの霊力を取り込んで、あの方にお渡しする。そのために・・・一度目はうまくいったのよ。でも、陰陽師の守りの力のために、二度目は失敗したわ。だから先日私が灯さんに近付いたの。守りの力を奪うために」

出会いがしらぶつかって、倒れた灯を保健室に運んでくれた――それが、水木志樹との出会いだった。

ぶつかって倒れて、相手を見ようとしたら、額に何かが触れて……灯は気を失ったのだ。

海風が心配して、その夜から水晶のお守りを貸してくれた。

そういえば、その数日後、偶然帰りに水木と会い、水木のメアドを携帯に登録しようとしたとき、首筋にすごい静電気を感じた事があった。

あの後、水木は強引に灯を自分の家に連れて行こうとしたが、突然現れた紫苑に助けられたのだ。

あれは故意の仕組まれたものだったのか。

「……やっぱり、あなたが海風くんの水晶のお守りを盗ったのね」

「キスに、あなたが呆然としている隙にね。仕方がないのよ、あのお方の目的のためにはあなたの霊力は絶対必要なんですもの。それにはあのお守りの力は邪魔だったの」

「……あのお守りは海風くんの大切なものなの。返して！」

「灯さん、そんな心配無用よ。だってもうあの陰陽師に返す必要はなくなるんですもの。今頃兄が、これ以上邪魔をしないように手を

打っている筈よ。そもそも兄が一昨日やり損なわなければ、二度手間をかける必要はなかったのだし」

「海風くんを襲ったのは、水木先輩なの？」

「もちろん。……あの方が兄におっしゃったの。『再び忠実なしもべとなるためには、誠意を示せ。そのためには邪魔な陰陽師を始末せよ』と。だから兄は証明して見せたのよ。だけど、兄は……あの人はやはり甘いよね。一晩で退院する位の軽症しか与えられないなんて」

海風は背後から襲ったものは人間に違いないと言っていたが、実際彼を怪我させたのは水木だったのだ。

あの優しい水木が海風を傷つけたなんて信じられない。

だが、初めから海風は水木に気をつけろと言っていたのではなかったか。

それに耳を貸さなかったのは、灯自身だ。

そして、結果的に海風を危険にさらしてしまった。

今、小夜は『今頃兄が、これ以上邪魔をしないように手を打っている筈よ』と言った。

それは、灯を守ろうとする海風を阻止するため、再び彼に危害を加えるということではないのか。

海風のもとに行かなくては――――。

灯は小夜の手を振りほどこうとした。

だが、小夜は常人とは思えないほどの力で、灯の手を握り締めて離さない。

灯はパニックになった。

海風は一人で行動しないように言っていたのに。

また、迷惑をかけてしまう。
自分の短慮な行動のせいで、また海風を危険な目に合わせてしま
う。

その時、灯の視界の隅に閃く紫が映った。
いつか見た蝶だった。

小夜の後方を優雅に舞いながら、緑の間をすり抜け、横切っ
て行く。

————紫苑さんだ。

紫苑が来てくれている。

ということは、差し当たって、海風には、まだ危険が及んでい
ないということだ。

頭に上っていた血がすっと下がって、冷静になっていく。
自棄になっては敵の思う壺だ。
ちゃんと考えて、正しい道を見極めなければ。

灯は一つ深呼吸をすると、小夜の手を握り返し、じっとその目を
見つめ返す。

一瞬、小夜の目が瞠られ、表情から笑みが消えた。

「……なぜそんな落ち着いていられるのかしら。分かっている
やらの？ あなたはずっと兄に騙されていたのよ。最初から兄は
霊力目当てであなたに近付いた。あなたは何も気づかず、そんな兄
を救うつもりでここに来て、今はあのお方に命を握られているのよ。
本当に人を見る目がないのね」

「人を見る目がない？」

「そうよ。兄は所詮そんな男なの。一時はあなたの肩を持ちながら、力の強いあのお方の前では、簡単に屈してしまうような人間なの。なのに、あなたは……」

「それは違うわ!」

確かに水木は下心を持って、灯に近付いたのかもしれない。

だけど、真剣に灯の自立の相談に乗ってくれた彼の姿、落ち込んだ灯が彼の言葉に笑ったとき、「やっと笑ったね」と返してくれた笑顔、それらが全部演技だったとは信じられない。

『中3で、八神さんの一つ下なんだ。』

妹も大人しいけれど、芯はしっかりしていて…

案外八神さんと気が合うかもしれないね———』

水木の言葉を思い出す。

妹の事を語るとき、彼は本当に優しい表情をしていた。

妹にどうしてやるのが正しいのか分からないと、心から小夜を心配していた。

「やっぱり違う。水木先輩は本来まっすぐで思いやりのある人だと思う。先輩が道を外したのだとしたら、それはあなたのためなんだわ」

「え?」

「先輩、本当にあなたのこと、心配していた。あなたのこと、大切に仕方がないって顔をしていた。温和で優しい先輩が人を騙したなら、人を傷付けたなら、それは自分のためじゃない。誰か大事な人のためだと思う。……それはきつとあなたのためだわ」

「……」

いきなり小夜の顔がクシャツと歪んだ。

「お：兄ちゃん……」と小さく呟くと、灯の手を離し、両手で自分の頭を抱えた。

「あ、頭が…痛い……」

「小夜さん？」

急に崩れ落ちそうな小夜の様子に、灯は驚いて彼女の両脇を支え、顔を覗き込もうとした。

その時。

エントランスの扉が音もなく開き、中からまるで生き物のように黒く蠢くものが噴出した。

声を上げるまもなく一瞬にして、灯と小夜は果てしない暗闇にすっかり取り込まれてしまった。

* * * *

その頃、竹林を左右に眺めながら、邸に続く坂道を、海風は自転車で駆け上っていた。

まるで重力に逆らうかのように、風を切って、滑るように走る。

この坂の先に、強い邪な^{よこしま}気配が滞っている。

ずっと探っていた灯の気配が、その瞬間ふと消えたのを感じ、海風は舌打ちをした。

灯が今日行動することは、読んでいた。

慣れ親しんでくると、灯は表裏がない性格なだけに、置かれた状況から彼女の行動を予測するのは容易かった。

いくつか手は打っている。

だけど、敵の力を甘く見て、取り返しがつかないミスは犯せない。

灯と同時に、彼の式神である紫苑の気配も読めなくなった。

紫苑は灯と行動を共にしているに違いない。

それにしても、急がなくては時間は充分にはないのだ。

ふいに微かな殺気を感じた。

何かが空を切り、自転車の車体に衝撃を与えたときには、海風の体は宙を舞っていた。

派手な音を立てて、自転車が地面に倒れる。

「また、不意打ちか？　そう何度も同じ手は食べへんで」

剣呑な表情で立ち上がると、海風は自分を襲おうとした相手に向き合った。

「卑怯だとは思ったけど、まともに戦って君に勝てるとは思わなかったからね」

「……やっぱり、あんたやったんやな」

道の脇、竹林の中でも特に太い竹の陰から現れたのは、木刀を持った水木志樹だった。

「悪いけど……ここから先に行かせるわけにはいかない」

「今回はちょっと殺気が漏れとったけど……気配を消すのがうまいんやな」

「剣道は長い間、やってたんでね。こちらの学校には剣道部がないから、転校してきてからは帰宅部だったけどね」

「——あんたに構っている時間はないねんけど」

「……君にも灯ちゃんにも僕はすまないと思っている。だけど、たとえ自分の命を引き換えにしても、失えないものがあるんだ。他に道はない!!」

海風の進路を塞ぐように、水木は木刀を構えながら、前に回り込んだ。

15、死闘(1)

海風の耳元で風が唸る。

水木志樹の太刀筋は鋭いが、所詮は趣味の延長にあるものだ。

海風が生業を前提に、幼少の頃から様々な場で鍛え上げられてきたものとは違う。

先日のように不意を突かれるのでなければ、その攻撃を避けるのは難しくはなかった。

「やめろ。おまえを傷つけとうない。このまま俺を行かせろ」

「ダメだ。そんなきれいごとを言うな！ 君を倒さなければ、僕は大切な者を失うんだ。————君こそ、八神さんを守りたいなら、本気で僕を倒せ！」

「俺を倒して、それで本当に守れんのか？ おまえの大切な者を。俺を倒したところで、おまえらがヤツから自由になれる補償はないで。おまえの大切な者とは水木小夜……お前の妹のことやろ？」

「そうだ。……それに両親も。……家族を死なせるわけにはいかないんだ」

「かわいそうやけど、おまえの妹の精神は既にほとんど喰われてしまってるようや。おまえもヤツが人間やないことぐらい分かってるんやろ？ 俺を足止めしてる今にも、完全に心は死んでしまうやろう。例え肉体的に生きてるように見えてもな」

海風の言葉の衝撃に、志樹の動きが一瞬止まる。

その機を逃さず、海風は懷から呪符を取り出し宙に投げると、素

早く五芒ごぼうを描いた。

足元から、ぶわっと空気が爆ぜるように風が巻き起こる。
二人を取り巻く竹林が大きく揺れ、ザワザワと騒いだ。

『縛！』

海風の声とともに空気の渦に羽交い絞めされ、志樹は動きが取れなくなった。

だが視線は海風を睨み付けたまま逸らさない。

「くそっ、————こんな事ができるなんて……君も人間じゃないのか？！」

「いや、俺は真正正銘の人間やで。ちょっと古から伝わる秘術を使えるだけのな。俺から見ればおまえの方が人間やない。おまえを信じとった灯の気持ちを裏切りよって。それが人間のすることか！」

「君に何がわかる。……僕だって、平気じゃないさ。でも、どんな状態でも、僕は家族を見捨てるわけにはいかないんだ。何を対価にしても……例え僕の命をかけても……守らなくてはならないんだ」

「……その気持ち……命を賭けてでも誰かを守りたい気持ちは、今は俺にもわかる。なぜなら、きつと俺は、おまえが妹を想う以上に、灯を想てるさかいな。だから譲られへん」

「——」

「灯を犠牲にはさせへん」

「—————だけど！」

必死の形相で身を振る志樹から丘の上の西洋館へ、海風は視線を移した。

「おまえには感じられないだろうだが、妖かしの臭いがプンプンや。さっき灯とおまえの妹の気配も飲み込まれて読めなくなった。……時間はかけてられへん」

再び志樹に視線を戻し、海風が『解!』と唱え両の手を広げると、風の戒めが解かれ、志樹はがっくりと両膝をついて崩れ落ちる。

海風は志樹に近付くと、いきなりその胸倉を掴み、容赦なくその頬を叩いた。

「目を覚ませや。……おまえは二つ、大きな間違いをした。一つは灯の信頼を踏み躪ったことや。あいつはおまえを心配して、危険を承知であの洋館に行ったんや。人として、俺はおまえのやり方が許されへん」

志樹が視線を落とす。

海風にとって灯は、暗闇に、いつの間にか差し込んできた一筋の光だった。

癒してくれる、温めてくれる、そして導いてくれる光。

今は淡い光でも、いつかかけがえのない標になる予感があった。

「……それにもう一つ。もし、おまえの家族を救える者がいるとすれば、それはおまえやない。俺や」

「君……?」

訝しげな表情で、志樹が海風を見上げる。
海風はニヤツと笑って答えた。

「ヤツは俺の生業については何も明かさなかったようやけど。俺は陰陽師。妖かしを祓うプロや」

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

誰かのすすり泣く声に、意識が覚醒する。
周りを見回せば、アンティークな家具の置かれた広い1室に、灯はいた。

昼間の筈なのに、窓は真っ暗で外の景色は見えない。
ただ高い天井に吊り下げられた豪華なシャンデリアが冷たい光を辺りに投げかけていた。

隣で小夜が震えながら、顔を伏せている。

「大丈夫？」と肩を軽く揺ると、小夜は歪めた泣き顔を上げた。

「お……お兄ちゃんはどこ？ 助けて…怖い……」

傲慢とも思えた態度が180°変わっている。切羽詰ったような様子に、灯も戸惑う。――その時。

「困りますね。お嬢様を惑わせないで下さい」

聞きなれない冷淡な男性の声が耳を打つ。

振り返ると黒のベストに黒のズボンを身に着けた長身の男性が、微笑みながら片手をこちらに差し出す。

ゾワリと背中が粟立った。

「さあ、こちらへ。お嬢様」

「い…嫌…」

「我俣をおっしゃらず……さあ、こちらへ」

「……」

それまで恐怖に震えていた小夜の表情がスッと失われる。

震えが止まり、瞳の彩が消える。

「小夜さん!？」

灯の手を振り払うように立ち上がり、小夜はまるで操られているかのように、ゆっくり執事の前まで歩いていく。

男は満足そうに表情を緩ませ小夜の手を取ると、灯を見据えた。

「……いらっしやいませ、八神灯さん。ようやくあなたにお会いすることができて、嬉しいですよ。これでやっと私の宿願が果たせます」

「宿願？」

「お嬢様を蘇らせることです。あなたの霊力があれば、それは可能だ」

冷たいものが背中を流れる。

男の冷たい視線を受けて、一瞬気が遠くなりかけ、辛うじて現実
に踏み止まった。

闇に取り込まれる前に見た紫の蝶。

あれは紫苑に違いない。

ということは、海風は灯の危機に気づいているということだ。
きっと海風は来てくれる。

そのために今必要なことは、時間を稼ぐことだ。

「あなたの狙いは私でしょう。だったら、小夜さんは関係ないはず。
彼女は解放しなさい」

恐怖を押さえ込んで、灯は男の目を真っ向から睨み返した。

男はクスクスと心底呆れたように笑った。

「呆れた人だ。この兄妹はあなたを陥れたというのに、憎むどころ
か庇うとは。さすがは巫女の血を継ぐ者」

「巫女の血？」

「ええ。私はあなたのおばあさま、さらにはそのおばあさまも存じ
ております。霊力が桁外れに高いだけではなく、その人柄も高潔で
した。あなたはお二人に似ていらっしゃる。しかも潜在的な霊力は、
二人を遥かに上回っておられます」

男は小夜の手の甲に軽く口付けをすると、そっと手を離し、灯に
一歩近づく。

「……この娘を解放することはできません。この娘はお嬢様の大切

な器ですから」

「うつわ？」

「はい。お嬢様に再び生を吹き込むには3つの物が必要なのですよ。このお屋敷に漂うお嬢様の魂と……」

部屋の中程の空間に手を差し伸べ、

「器と……」

傍らの小夜に視線を向け、

「それと……二つを融合させるためのあなたの霊力です」

男は灯に視線を戻し、ゆっくりと向き直った。

「この娘の一家は許されない罪を犯しました。この思い出深いお邸を破壊し、お嬢様や私の安らかな眠りを妨げた。……この娘は、身を持って罪を償って当然。お嬢様の器になれるのですから、むしろこの上なく光栄な事なのです」

狂っている――――。

でも、相手は人間のような姿をしているが、人間ではないのだ。人の常識や理性を妖かしに求めても、無理というもの。

それより、今一番大事なことは時間を稼ぐことだと、灯はグツと奥歯を噛み締めた。

「お嬢様というのは一体……」

「150年前、このお邸にお住まいになっていた華族のお嬢様です。お美しく、ご聡明で、とてもお優しい…この世にまたとないお方でしたのに…あなたと変わらないお年で、儂くなってしまわれた。…あの肖像画がお嬢様です」

ちらりと壁に飾られた肖像画を見る。

何枚かの絵の中に、小夜に良く似た美しい少女が膝に黒い猫を抱き、柔らかい笑顔を浮かべ、こちらをじっと見つめていた。

「…人間は傲慢にもこのお邸を暴き、破壊し、私たちの眠りを妨げました。中途半端に目覚めたお嬢様の魂をこの世に定着させること…あなたの霊力なら可能でしょう。人は死に至る瞬間、無防備になります。その瞬間に霊力を頂こうと尽くしましたが、忌々しい陰陽師の若造に邪魔され、手出しができなかったのです。この娘の兄に命じて、黒水晶を使って、徐々に霊力を奪うことも試みたのですが、あなたの守りの力が強く失敗しました。…ですから、この娘に守りの力を奪わせたのです。あの勾玉に、妖かしは手を出せませんから」

話を続けながら、一步二歩と男が灯に近付いた。

それに合わせ、灯も一步二歩と後退した。

しかし何度か繰り返すうち、トンと壁が背に当たり、逃げ場を失ったことに気づく。

「今こそ…あなたのその命と霊力…お嬢様のために————」

「嫌!!」

灯は伸ばされた手を振り払って、壁沿いに逃げた。

部屋に二つあるドアのうち、一つのノブを掴んでガチャガチャ回そうとするが、ドアは固く閉じられたままだ。

「無駄です。このお邸は完全に閉じられていて、外の世界とは遮断されているのです。逃れるすべはありませんよ」

背後に男の気配を感じ、慌てて壁沿いに駆け出す。

男は目を細め、笑いながら、しかし焦る様子もなく、灯の後を追う。

まるでネズミを追いつめる猫のように、楽しげに。

灯はもう一つのドアのノブに飛びつくと、開けようとしたが、ドアはやはりビクともしなかった。

『……万一、危険な目に陥ったら、その時は俺の名を呼んで。――』

そう言ってくれた海風の真面目な口調と、真摯な瞳の色が灯の脳裏を過ぎった。

絶体絶命の危機に想いは溢れる。海風の元へと。

「助けて！ み……海風！」

瞬間。空気が揺れ、フツとシャンデリアの明りが瞬いた。

それまで余裕を見せていた男の顔が歪む。

「……あの小生意気な陰陽師を引き止めるのに失敗したようですね。……邪魔が入る前に、済ませてしましましょう。遊びは終わりです」

その言葉とともに、灯は突然後ろから、何かに拘束され動けなくなった。

振り向くと、虚ろな顔をした小夜が灯を羽交い絞めに使っていた。

「やめて。小夜さん！」

「無駄です。彼女にあなたの声は聞こえない」

男の瞳の光彩が細くなる。

それは男が人でなく、異形のものであることを示していた。
動きが取れない灯に、男が近付いてくる。

「み、海風・・・海風、海風・・・」

恐怖に折れそうな心を、呪文のように海風の名を呼び、彼の笑顔を思い浮かべることで、かろうじて繋ぎ止める。

ふと絶望に取り込まれそうになる灯の視界を、紫の蝶の影が過ぎた。

「紫苑さん！」

そのまま男が喉を目掛けて喰らい付こうと迫るのを感じ、灯がギョツと目を閉じた瞬間。

フワツと体が浮いた。

誰かに抱きかかえられ、宙を舞うようにして、灯は部屋の反対側に着地した。

スツと守るように灯の一步前に出たのは、小学生の姿——詩織の姿をした紫苑だった。

こちらを振り返った男の横に、小夜が倒れているのが見える。

「紫苑さん、小夜さんは？」

「...これ以上心が喰われてしまわないよう、少しの間眠ってもらっ

ただけです。海風は邸の外まで来ています。さっきの振動は海風が邸の結界を破ろうとしたもの。灯さん、もう少し、頑張って」

「ええ」

やはり海風は来てくれたんだ。

そう思っただけで、心が満たされる。勇気が湧いてくる。

すぐそばに紫苑もいてくれる。

一人じゃないという思いが、灯の心持ちを強くする。

相手の男がみるみる獣に変化していく様子も、冷静に眺めることができた。

「黒豹？」

体長3メートルほどある真っ黒な獣。

強いて言えば、その姿は、黒豹に似ている。

ただ、その毛並みは長く逆立ち、尻尾が二股に分かれている。

光彩の細い真っ赤に染まった眼は、それが通常の血の通った動物ではないことを示している。

灯の呟きに、紫苑は「いいえ、仙狸せんりという名の妖かしです」と答える。

「もともとこの邸に飼われていた黒猫が長寿の末変化し、神通力を身につけたのでしょう。人の精気を吸い取ったり、人を喰らって成りますとか。気をつけて下さい——」

紫苑が言い終わらないうちに、仙狸の前足の鋭い一閃が灯を襲った。

だが、直前に紫苑に引かれて、その体はふわりと宙に飛ぶ。まるで重力を感じない。

それが紫苑の持つ力の一つなんだろう。

着地するところを見計らったかのように、次の攻撃がくる。それを右に左にと際どいところでかわすが、灯を庇っているせいで、どうしても防戦一方になる。

時折、タイミングを計って、紫苑は灯を支える反対側の手を、仙狸に向かって水平に薙ぎ払った。

風が空気を裂き、刃となって襲い掛かるが、仙狸にたいしたダメージは与えられないようだった。

仙狸の攻撃をかわし、幾度目かに着地した時。

着地した足に痛みを感じて、灯の体はグラリと傾いた。

「危ない！ 灯さん、頑張つて。あと少しで海風が屋敷の結界を破るから」

振り返って灯を支える紫苑の隙を仙狸は見逃さなかった。

サツと仙狸の2本の尾が伸びると、1本が紫苑の体を横払いに弾き飛ばす。

「紫苑さん！」

とっさに紫苑に伸ばされた灯の腕に、もう1本の尾がスルスルと巻きついた。

そのままグイと天井に向かって引っ張られた腕が焼けるように熱くなり、激しい痛みが駆け抜ける。

灯は半ば宙吊りになった状態で、身動きが取れなくなった。

16、死闘(2)

「ああ・・・これほどの霊力とは――」

仙狸の嬉々とした声が聞こえる。

霞む視線の中、仙狸の闇色の毛並みが金色を帯びる。

体中の力が、捕らわれている腕からどんどん抜けていく気がした。

「あ・あ・あ・あっ・・・!!」

同時に、紫苑に眠らされた筈の小夜が突然身を振って苦しみだした。

紫苑を弾き飛ばした尾が小夜の腕に絡みついている。

灯から力が抜けるほど、小夜の苦しみが増すようだ。

まるで、仙狸の2本の尾を電流が流れるように、自分から奪われた力が、小夜に激しい影響を与えていることだけは、灯にも分かった。

仙狸は小夜のことを”お嬢様”を蘇らせるための『器』だと言った。

身を持って罪を償って当然と言っていた。

小夜の身に何かあれば、兄である志樹は悲しむだろう。

小夜を守りたいのに、

何とかしないといけないと思うのに、体が言うことをきかない。

海風くん・・・ごめんね。

一人で行動したらいけないって言われたのに、言うこときかなくて。

でも、水木先輩を放っておけなかった。

後で後悔するのはわかっていたから。

かと言って、退院したばかりの海風を危険な目に合わせる訳には
いかなかった。

助けを求めれば、海風はきつと無理をして、灯に手を差し伸べて
くれるのは分かっていたから。

涙で視界が歪む。

意識が遠くなる。

もうダメだと思ったその時――――。

「……――――させない!!」

壁に叩きつけられ、伏せた床から身を起こした紫苑が、渾身の力
を込めて右腕を振り上げた。

たちまち風が唸りを上げ、刃となって、灯の腕を捕らえている仙
狸の尾を切断する。

「チッ！」

床に倒れこんだ灯を再び仙狸のもう一本の尾が襲ったが、それも
紫苑の一閃に阻まれる。

次の瞬間、パリンと音がして、闇色をしていた窓ガラスにヒビが
入り、スツと光が差し込んできた。

「灯――――っ!!」

「くっ……もう少し、もう少しで、お嬢様が復活なさるのだ。こう
なったら直接私の牙で、あなたの霊力と生血を頂くまで！」

ずっと聞きたかった声が、自分の名前を呼んだ時。

黒い獣が目にも止まらぬ速さで、弾むように灯に向かって跳躍した。

やっと腕を解放されたものの、まだ体は痺れたように動かない。逃げられないと、恐怖にギュッと目を瞑って、次に自分を襲うであろう衝撃を覚悟する。

だが、予想に反し、仙狸の牙が灯に届くことはなかった。

「し…紫苑……さん!？」

恐る恐る目を開けた灯の視界に映ったものは、灯を守るように両手を広げて立つ紫苑の後姿とその肩口に噛み付いた仙狸だった。

紫苑の肩から鮮血が滴る。

紫苑の肩越しに灯に向けられた仙狸の目が、笑ったように細められた。

仙狸の黒い毛並みが逆立ち、金の色を帯びる。

「ぐっ————!!」

紫苑が苦痛の呻きを上げる。

灯を庇った両手が力を失い、ダラリと下がる。

見る見る紫苑の体から精気が失われていくのが分かった。

紫苑は式神だ。

神の眷属である式神は霊力も高い。

仙狸は必要な霊力を灯からではなく、窮余の策として、紫苑から奪うことに決めたのだ。

「だめ————っ!!!!」

灯は反射的に紫苑の背に抱きついた。

紫苑を殺させる訳にはいかない。
どうしても守りたい。
どうしても。

突然、カッと灯の全身が燃えるように熱くなった。
抑えきれない何かが、体の中心から急激に溢れ出る。
経験したことのない感覚に、恐れを感じる。

だけど、本能的に、紫苑を、小夜を守るためにはこの衝動を抑えてはいけないことを、灯は悟っていた。
ギュッと目を閉じ、熱を帯びる体の中心に意識を集中する。
体が熱い。空気が熱い。何もかもが焼けるようだ。

綻んだ結界をようやく打ち破り、広間に飛び込んだ海風は凄まじい霊力が弾け飛ぶ光景に息を呑んだ。
その中心に灯がいる。
霊圧に逆らいながら、焦る気持ちを抑えながら、ジリジリと灯に向かって進む。

「――灯、あかん！ 力の放出を止めるんや！」

後ろから包み込むように抱きしめた。

霊圧に腕が焼けるようだ。

でも、離さない。何度も繰り返し、灯の名を呼ぶ。

暖かく響く声。懐かしく優しい声。

「……遅なってゴメン。でも、もう大丈夫や。…ええから、紫苑から手を離すんや。力を抜いて――」

頭だけ振り向くと、心配そうな海風の顔があった。

言われたように、紫苑から手を離すが、力の抜き方がわからない。
燃えるような熱の治め方がわからない。
それどころか、どんどん熱は高まっていくばかりで。

「落ち着いて、大丈夫やから。……これ以上霊力を使ったらあかん」

そんな事を言われても……何がどうなってるかも分からない。

息が苦しくなってきた。

徐々に視界が暗くなっていく。

灯は、前に回された海風の腕、そのジャケットの袖口をキュッと握り締めた。

「…灯、ゴメン！」

突然クイツと顎に手を添えられ、上を向かせられると、暖かい感触を唇に感じた。

——————キス？

ど…うして…？

そっと触れただけのキス。

だが、灯はキスをされていると自覚した瞬間、全身の熱が顔に集中した。

何も考えられなくなって、体中から力が抜け、足から崩れそうになったところを、海風に支えられる。

「大丈夫か？ 良かった、なんとか間に合ったみやいやな」

海風にぎゅっと強く抱きしめられる。

灯は何も答えられなかった。

あまりに疲れすぎてしまって、返事をしたくても声も出ない。
顔を上げるのも億劫なほど、力が入らない。

そんな灯に、安心させるように頷いた後、灯を庇うように立った
海風は、剣呑な眼差しを仙狸に向けた。

懷から呪符を取り出す。

海風の動きに合わせて視線を仙狸に向けた灯は、魔獣の変わりように目を見張る。

しなやかな黒豹のような姿は、容積が膨れ上がって、2本の尾を失った仙狸は、まるで丸々と太った巨大な黒牛か黒豚のようだった。
動きも鈍く、ジリジリと後ずさると、赤い眼を細め、唸り声を上げた。

「えらい目に合わせてくれたな。灯ちゃんと紫苑を痛めつけてくれた礼、きっちりさせてもらおうで！」

海風が呪符を目の前に掲げると、仙狸はクルツと体を変え、床に倒れている小夜に踊りかかった。

「お嬢様——！！！」

「そうはさせへん！————『裂！！』」

呪とともに、海風が放った呪符は刃となり、仙狸の首筋と脇腹を切り裂く。

パツと鮮血が散ると同時に、魔獣の傷口からブオツと何かが吹き出た。

膨れ上がった風船の空気が抜けて萎むように、シュルシュルと音を立て、見る間に仙狸は萎んでいく。

「傷口から抜けていつてるのが、あいつが灯から奪った霊力や。それさえ失ってしまえば、二股を失った仙狸など恐れるに足らんわ」

気を失っている小夜のすぐそばで、体から全ての霊力が抜け、床に寝そべった状態の仙狸は、体長50cmほどの、ごく普通の黒猫に見えた。

ただその瞳は燃えるような不思議な赤で、威嚇するように唸り声を上げている。

周りの光景は、先ほどと随分変わっていた。

豪華で煌びやかな室内は、いつの間にか廃墟と言って良いほど、荒れた様相を呈していた。

家具は消えうせ、壁や床はもう何十年も捨て去られたように、所々朽ち果てている。ただ、壁に飾られた絵は、かなり色あせてはいたが原型を留めていて、黒猫を抱いた少女の笑顔が逆にとっても切なかった。

視線を足元に落とした灯は、違和感を感じた。

さっきまで灯を守ってくれていた紫苑の姿がないのだ。

ただでさえ霊力を奪われて貧血のような頭が回らない状態なのに、本当に血液がサアツと下がって、心がパニックになった。

支えていなければ間違いなく倒れてしまう様子で、なのに急に腕の中で身を振りだした灯に、海風は正確にその心中を察したようだった。

「紫苑なら、大丈夫やで。顕現してんのは、それだけで霊力を使うから、今は姿が見えへんようになっただけや。紫苑を守ってくれて、おーきに、な。今チャッチャとあいつを片付けるさかい、ちよっと待っててや」

紫苑が無事だと聞いて、灯はホッとした。

妖かしを調伏するのは、陰陽師である海風の得意分野だ。

このまま仙狸を滅せば、この事件も落着する。

貧血の者が睡眠を必要とするように、安心した灯の意識も飛びそうになる。

だけど、何かがずっと心の奥に引っかかっている、現実意識を繋ぎ止めていた。

再び海風が呪符を取り出し、呪を唱え始めたとき、仙狸の前の空気が揺らめいた。

『…お…がい……。クロ…を……。祓わ…な…。いで……。闇の世界にやらないで…』

驚いた灯が目凝らして見つめると、まるで磨りガラスを通して見るように、微かな人影が浮かび上がる。

クロというのが、仙狸の生前の名前なのだろう。

すると、この影は仙狸が言っていた「お嬢様」に違いない。

今まで妖かしが全く見えなかった灯に、なぜ見えるのか。

己の内に閉じ込めていた霊力を解放したためか、こうして霊力の高い海風に触れているからか良く分からない。

だが、心の隅に引っかかっていたものが、はっきり胸の中に形作っていた。

人間は、この思い出深いお邸を破壊し、お嬢様や私の安らかな眠りを妨げたと、仙狸は言っていた。

中途半端に目覚めたお嬢様の魂を蘇らせるのが、自分の宿願だとも。

仙狸の主人であった少女の靈魂は、やはりこの世を彷徨ったままなのだ。

ただ大好きな主人を救いたくて。守りたくて。

その想いから、妖かしに身を落としたのだとしたら————。

「そうはゆうても、何の落ち度もない灯に、今までそいつがしてきた仕打ちは許されへんで。それに、一度妖かしに身を落とした靈魂が成仏するのは難しい。でも、放っておく訳にもいかんやろ」

海風が影に向けて、低く言葉を言い放つ。

声の加減から、彼がかなり怒っていることが分かる。

『…ごめんな…さい。…そうですよね。……では…せめてわたくしも…クロと一緒に滅して…ください。クロ…と…一緒に祓って……』

ダメ————。

灯は氣力を振り絞り、腕を伸ばして呪符を持った海風の手に自分の手を重ねた。

「灯!？」

ゆるゆると首を振る。

海風が怒っているのは、灯のためだ。

灯は、確かに仙狸にずっと付け狙われ、命を脅かされてきたのだ。しかも灯の周りの人たち——海風や紫苑、水木志樹や小夜兄妹も危険に陥れてきた。

だが、その理由は、仙狸の影の少女に対する深い想いだった。

単に飼い猫が主人に寄せるような忠心を超越した、まるで永遠の恋人に自分の全てを捧げるような一途な気持ち。

飼い主であった少女も、深い愛情を自分の猫に返していた。

それを考えると、灯は怒りよりも切ない気持ちで胸がいっぱいになった。

『すべて…わたくしの…ためだったのです。本当は…とても優しい子だったのに……。わたくしが死んだ時、……両親は火葬するに忍びず、敷地内に小さな礼拝堂を建て、地下にわたくしを安置したのです。わたくしの後を追うように亡くなったクロも、両親の計らいですぐ傍で一緒に眠りについていました。……でも、その礼拝堂が壊されてしまって…目覚めたわたくしの魂は、成仏もできず、この屋敷を離れることもできず、…地縛霊となって彷徨うばかりでした。……クロはそんなわたくしを救おうとして…わたくしがあの子を魔獣にしてしまったのです。……あの子一人を闇にやるわけにはいかない。…せめてわたくしも一緒に……』

「そりゃあ、…事情を聞けば、気の毒やと思うよ。幸い、あんたはまだ闇に染まっていない。祈祷によって、光の道に戻ることができるやろ。仙狸のことは諦めえや。一度闇に吞まれたものが光の道を歩くのは難しい。仙狸もあんたを闇に落とすのは望まんはずや」

『いいえ…どうしても…一緒に……』

影が項垂れ、空気が震える。

灯は重ねていた海風の手をキュッと握った。

海風が困惑した視線を灯に向ける。

途切れそうになる意識を振り絞り、灯は視線を重ねた。

「海風くん…お願い、女の子と…仙狸さんと…一緒に御祈祷を……。」

大丈夫…こんなに温かい気が…満ちて…いるんだもん。…きつと
うまく…いくよ」

「アホ！ 『温かい気』 って、それは仙狸から放出された灯自身の
霊力やん。どこまでお人好しやねん。…確かにここは神社の境内
のような、清冽な気に満ちてるけど…あいつらが灯にしたこと思
い返してみいや。同情なんて感じる必要あらへんって」

「でも…」

酷い倦怠感に言葉を連ねるのが辛くて、灯は微かにまた首を振る。
海風は、今まで仙狸が灯の命を脅かしてきたことに対し報いを受
けて当然だと考えている。

だが、もういいのだ。

知リたかったのは、なぜ自分が命を狙われるのか。

願ったのは、健康で平安な生活だ。

幸いなことに、灯は今も生きているのだし、水木志樹の一家も寸
でのところで救われた。紫苑も海風も無事だった。

仙狸が力を失い、今後の自分の生活を脅かさないと約束するなら、
それで十分だ。

お互いを想い合う、二人を引き離し、それ以上の復讐をしたいな
どとどうして思うだろう。

自分の気持ちをうまく伝える術がなくて、もどかしくて、海風を
見つめる瞳に涙が浮かび、ぽろりと一筋零れた。

そんな灯の反応は海風の予想外で。

驚いたように一瞬目を見張った。

灯の背中に回された海風の腕から、灯を支えられる程度に徐々に
力が抜けていった。

そして、手にした呪符をジャケットの懷にしまうと、ガシガシと

髪を掻き毟った。

「ああゝゝっ！ 分かったから！！ うまくいくかどうか分からんけど、とにかくやってみるから、もう泣くな！」

ぶつきらぼうにそう言うと、海風はそのまま灯を部屋の隅に連れて行き、ゆっくり壁に持たせ掛け座らせた。

それから内ポケットから、数珠を取り出すと、仙狸と少女の霊に向き直った。

「今から二人を成仏させる。邪な気持ちを持ったままやったら、うまく行くもんも行かん。自分らが今までやったこと、しっかり反省しいや」

そして、灯をちょっと振り返り、「……うまく行かんかって、がっかりしたらアカンで」と呟いた。

灯はクスッと微笑むと、重い瞼をゆっくりと閉じる。

海風がその気になったのなら、もう大丈夫だ。

辺りに漂う温かい気配に、張り詰めていた心が緩んでいく。

海風の柔らかい声が、真言を唱えるのを穏やかな気持ちで聞きながら、灯の意識はいつしか夢の世界に落ちていった。

17、どこまでも一緒に（完結）

ゆらゆらと揺れている。

広い背中にもたれ掛かって。

聞き慣れた心地の良い男性の声と、落ち着いた女性の声を耳にして、徐々に意識が覚醒してゆく。

まだ体が鉛のようだ。瞼が重い。

だけど、最近心に重く押し掛かっていたものが取り除かれて、気持ちは軽かった。

耳にする音声が、ぼんやりしている脳に徐々に意味を持って届き始める。

「……で、水木一家は、あの屋敷は手放すそうや。まあ、あんなことがあったのに、そのままあの家に住むなんてでけへんよなあ」

「水木さんのご両親は大丈夫かしら？」

「ずっと別室で人質として監禁されてたみたいやから、何があったのか、ようわかってないみたいやな。仙狸せんりにとって、最初から利用価値のあるのはあの兄妹だけやったんやろ」

「魂の器と、手駒として……ね」

一人は関西弁の柔らかな男の人の声。

いつも私に安心感を与えてくれる。

ああ、海風の声だ——と灯は思った。

一緒に話しているのは誰だろう。

紫苑だろうか。少し違和感があるけれど。

でも、海風が傍にいてくれるなら、何も心配することはない。

「……うん。あの女の子の霊はあの屋敷に地縛されて、敷地内から動くことはできなかったようやからなあ。仙狸のヤツもその傍を離れることはなかったんや。専ら水木兄や自分より劣る妖かしを手先に使って、霊力の高い者を探して、灯に目をつけた。灯の霊力を奪うのが難しなってからは、水木兄に灯をこの屋敷に連れてくるよう命じてたようや」

「それにしたって灯ちゃんは彼を信じていたのに……ひどいよ」

「水木兄には妹と違って仙狸の幻覚が効かんかったみたいや。あいつは最初から正気で、灯にも好意を持ってたようやけど、家族を人質に取られては仙狸の言う事を聞くしかなかったんやろな。仙狸を倒すとあいつに誓ってからは『八神さんと家族を助けてくれ』と、ずっと道を譲ってくれたわ」

水木先輩、海風くんに私を助けてと頼んでくれたんだ。
やはり一方的に裏切られた訳ではなかった。本当は優しい人だったんだ。

海風の背中で心地よく揺られる灯の表情に笑みが浮かぶ。

それにしても、海風は自分の事を『灯』と呼んでいたっけ？

「両親が長いこと仕事を無断で休んでた状態やから、なかなかすんなり以前の状態とはいかんやろうけど、一家4人、命は助かったんや。また家族で一から頑張るやろ。別れ際のあいつは笑顔やったしな」

「うん……。最終的に、みんな丸く収まって良かったね。仙狸とあ

のお嬢さんも無事成仏できたし。酷い目に合わされたけど、仙狸があの女の子の霊に寄せる想いがあまりに一途でだから、切なくて、憎みきれなかったよ」

「女の子はともかく、仙狸の成仏は難しいと思ったけど……あいつの成仏がうまく行ったのは俺の力じゃない。あの場に満ちていた灯の霊力が持つ浄化の力のおかげやろな。あいつらにしたら、ほんまラッキーやったんや」

仙狸と女の子も無事成仏できたなら良かった。

自分の力が助けになったのなら嬉しいと、灯は思う。

「……で、壬生のご隠居様に頼まれた件、全て一段落した訳でしょ？　じゃあ、京都に帰るんだよね」

「うん。そやな——」

————京都に帰る。

いきなり心臓にズキンと痛みを感じた。
分かっていったことだった。

海風がいつか京都に帰ること。灯の人生からいなくなってしまうことは。

だけど、今まで努めて考えないようにしてきたのだ。
海風に背負われて、その首筋に顔を埋め、その香りに包まれて、
ずっとこうしていたいと思う。

「『そやな』って……無責任。灯ちゃんはどうするの？　霊力の扱い方も分からないまま海風がいなくなれば、また第2・第3の仙狸に狙われるかもよ。それに、一般的な女子高生にとって、ファース

トキスが『人工呼吸』、セカンドキスが『気付く葉代わり』というのはどうなのかしら。ホント灯ちゃんが気の毒で仕方がないわ」

灯は話の内容に内心激しく動揺したが、目覚めた事が海風に伝わらぬよう、目を瞑ったまま何とか平静に努めた。

「ファーストキスはともかく、セカンドキスの方は、俺なりに気持ち込めたつもりやってんけど」

飄々とした語り口で、海風が言う。

そういえば、出会った頃は、その口調が軽く感じられて、どこまで本気か分からなくて、彼を苦手に感じたこともあった。それで、お互いの気持ちがいじれてしまったことも。

でも、今はそこに照れがあるのが分かる。素直に気持ちが表わせないのだと。

不器用で、寂しがりで、だけど誠実な人。

彼の言葉に嘘があったことは一度もなかった。

あの戦いの中、体を焼きつくされるような感覚の中で、そっと唇に触れた海風の熱を思い出し、灯はこっそり頬を染める。

「――せやから、ちゃんと責任取るって。俺は最初からそのつもりやってんから」

だが、海風のそんな返事を耳にして、灯は反射的に声に出して問いかけていた。

「……『責任取る』って、どういう意味？」

「え!？」と、驚いた海風が肩越しに振り返ると、至近距離で灯と

目が合った。

慌てたように再び前を向いたため、灯に海風の表情は見えなくなった、耳が真っ赤になったところを見ると、照れているようだ。

「ねえ。『責任取る』って？」

「――灯ちゃん、自分いつから目、覚めてたん？」

「ん……さつきからだよ。で、『責任』って……？」

「そうそう、ちゃんと説明してもらわなくっちゃ」という声に、ふと視線を向けた灯は、そこにいた女性の笑顔に固まった。

何とはなしに、海風と話しているのは紫苑だと思い込んでいた。

だが、確かに違和感があった。

今、見覚えのある自転車を押しながらニッコリ微笑んでいる女性は、どう見ても灯より年上だ。20歳代前半といったところだろうか。

白いワンピース姿なのは紫苑と同じだが、紫苑がせいぜい灯の胸の辺りの身長だったに対し、目の前の女性は海風とそう差がないように思える。という事は、灯より10cmほど背が高いということの意味する。

薄化粧だが、目鼻立ちのはっきりした美人だ。プロポーションも文句のつけようがなく、無造作にポニーテールにした艶やかな黒髪は腰まで届きそうだ。

そんな美女が、海風と親しく言葉を交わしている様子を見て、灯は思わず目を伏せた。

「私、紫苑ですよ。灯ちゃん」

急にテンションの下がった灯に、美女は苦笑して囁いた。

「……紫苑さん？」

「ええ」

「え！？　でも、なんで？　その姿……」

「灯ちゃんの霊力のおかげです。あの時、仙狸に力を奪われた私に、灯ちゃんが力を解放してくれなかったら、きっと今頃私は消滅していました」

「……」

話が読めなくて怪訝な顔をしている灯に、海風が紫苑の言葉を補足した。

「ただ、灯が放出した力が膨大すぎたから、紫苑の力が上がって、そのため見た目も大人になってしもたって訳や。ちなみにあの時、紫苑の霊力を奪っていた仙狸も灯ちゃんの霊力を受け止めきれずに、許容量を超えてしもた。仙狸の力の源は2本に別れた尻尾や。で、既に尻尾を失ったヤツは、術で体に亀裂を与えるだけで、簡単に弾けて力を失い、ただの黒猫の霊に戻ってしもたって訳や」

「……」

「ホンマびつくりした。多少予想はしとったけど、灯にあれだけの霊力が秘められてたなんて。：でも、爆発的な放出やったもんやから、俺も正直焦ったで。あのまま霊力の放出が止まらんかったら、かなりヤバかったかもしれん。ホント、無事でよかった……」

「うん。……ありがとう。また海風くんに助けてもらったね」

「いや。今回助けてもらったのは、こっちの方や。ありがとう」

海風から感謝の言葉をもらって、灯は胸が熱くなった。

泣きたいような気持ちになって、思わず海風の首筋に顔を埋めた。

「灯？」と心配そうな海風の様子に、灯は俯いたまま、ふるふると首を振る。

「嬉しいの。私、今までずっと周りの人に心配かけるばかりで…誰かの助けになれたのなら本当に嬉しい……」

「そんなことあらへん。自分で気が付いてないだけや。現に俺はこっちに来てからずっと灯に背中を押してもらってたような気がする」

「そうそう。元々海風はかなりチャランポランな性格なのよ。それがこっちに来て、どんどんマトモモードになっていくんだもん。灯ちゃん効果ね。きっと京都の安部の御当主も喜んでおられるわ」と横から、紫苑が口を挟む。

「やかましいわ」と海風がムツとして睨んだが、紫苑はしれっとした風情で自転車のスタンドを立てた。そして、灯の肩に優しく触れ、

「じゃあ、邪魔者は退散するわ。灯ちゃん、ちゃんと海風に責任とってもらってね」

と、ニツコリ笑うと、スッと姿を消した。

———きつと安部の御当主も喜んでおられるわ。

紫苑の言葉を胸の中で繰り返す。

さつきぼんやり聞いていた会話。紫苑の『京都に帰るんだよね』という言葉に対し、海風は『うん。そやな』と言っていた。

にわかに現実味を帯びてきた海風との別れに、灯は胸が締め付けられるような気持ちがあった。

「目も覚めたみたいやし、チャリで帰るか。後ろ、乗れる？」という言葉に、頷いて海風の背中から降りる。暖かな温もりが失われて、急に心細くなった。

海風がサドルに腰を下ろすのを待って、後ろのリアキャリアに横座りし、右手で海風のジャケットの裾を持った。

すると海風は灯の手を取り、自分の腰に回す。

その行為が優しくて、灯は思い切って、海風の背に気が掛かっていた事をそっと口にした。

「海風くん……事件が終わったし、もう京都に帰るんだね……」

『寂しくなるね』という言葉が続けることができなかった。何だか泣いてしまいそうな気がして。

「そやな。いつまでも親父と弟に任せきりという訳にもいかんし、今週末にも帰ろうかと思てる」

「今週末!？」

思ったより早い別れに驚いて顔を上げると、後ろを振り返っていた海風と視線が合う。

穏やかな優しい眼に見つめられて、灯の心拍数がふいに上がった。

「うん。————その時、灯にも来て欲しい。俺と一緒に」

「え？」

「責任持って、これからも灯のこと、守るから。そやからずっと傍におって」

「……」

「学校は転校せなあかんけど。転校先は何とでもなる。京都では阿部家って結構顔効くし」

「で、でも」

「俺んち、家だけは広いから、部屋もなんぼでもあるし、遠慮いらん」

「そんな。海風くんが私に責任感することなんてない。『ずっと』って……赤の他人の私が海風くんの家にお世話になるなんて、家族の方も変に思うよ……」

『灯にも来て欲しい。俺と一緒に』と。

『ずっと傍におって————』と。

思いがけない海風の言葉に、灯は素直に喜びを感じた。だけど、海風の言葉の意味を取り違えたくなかった。そんな揺れる灯の心中に、海風はさらりと衝撃的な言葉を落とす。

「ほな、灯は俺の婚約者ってことで」

「こ、婚約者!?!」

「ん。そやかて俺、まだ17歳で結婚できひんもん」

「で、でもそんな大切なこと、家族にも内緒で簡単に決めたりするのは……」

「『簡単に』とちゃうよ。でもきつと俺、これからもつと灯が好きになる思うんよ。俺には宇宙兄^{そら}みたいに未来を見る力はないけど、これは何となく確信持つてるんや。……それとも灯は俺のこと、嫌いなん?」

「嫌いじゃないよ!」

「じゃあ、好き?」

「え……」と呟いたきり、灯は恥ずかしくて顔を伏せた。だが、チラリと覗くと、耳まで真っ赤に染まっ^ていて。それを見ただけで海風は満足した。

「それに灯は靈力をコントロールすることを学んだ方が良い。清明神社の現神主はかなりの靈力の持ち主やし、きつと良い先生になっ^てくれるわ」

「でも、私きつと海風くんに迷惑かけれると思う。……今までもずっとそうだったんだもの」

「そんなこと、あらへん」

「海風君にも怪我させてしまったでしょう？ 私って昔から、そんな疫病神みたいところがあるの」

「でも、それ以上のもん、灯は周りに与えてるやん。……俺、宇宙兄弟が事件に巻き込まれてから、毎晩のように、その夜の夢を見た。いつも俺の代わりに出かける兄貴を止められへん。ずっと罪悪感を抱えて生きてきたんや。だけど、入院した夜の夢で、宇宙兄が初めて笑ってくれてん。それで『海風と大地はいつでも俺の自慢の弟や』って言うってくれたんや。以前の優しかった兄貴に本当に久しぶりに会えた気がした。で、夢から覚めたら、灯が俺の腕を抱きしめてくれてて……ああ、そのせいかと思った」

「それって……。あの時『センチメンタルな夢を見た』って言ったのは……」

「うん。宇宙兄の夢」

「……」

「俺、灯と話してるだけで、穏やかで幸せな気分になるゆうたけど、あれお世辞でも何でもあらへんし。なんか長い間、ずっと闇に捕らわれてた。逃れられず、もがいて諦めて……そんな時、足元に差し込んできた一筋の光なんや、灯は。……これからもずっと一緒にいたい思ってる」

そして、サドルに腰掛けたまま、リアキャリアに座る灯の瞳をいつになく真面目な顔で覗き込んだ。

「俺、灯のこと、好きや。たぶん初めて会った時からずっと好きや
った————」

腰に回している手に重ねられた海風の手の温もりに力を得て、灯
はぐいと背を伸ばすと、振り返っている海風の瞳を覗き込んだ。

「私、ほんとに海風くんのお荷物になってない？」

「うん」

「海風くんの・・・力になれる？」

「もちろんや」

「……じゃあ、私も海風くんと一緒にいたい。私も海風くんがす
……」

「!? えっ？」

自転車がぐらりと揺れて、驚いた灯は海風の腰に回した腕にギュ
ッと力を込めた。

海風が踏ん張っていた足の力を突然抜いたために、二人を乗せた
自転車は転がるように坂を下り始めたのだ。

すぐに海風がバランスを取ったが、自転車は滑るように加速する。
灯の決死の告白は、最後まで綴られることなく、悲鳴に取って
代わる。

だけど、言わんとすることは、海風にはちゃんと伝わったようで。

風が唸りを上げて、後ろに過ぎていくさまに、灯が思わず海風に
しがみ付けば、海風が明るい声を上げて笑った。

ハンドルをちゃんと握った海風の運転は、スピードこそ出ているが、自信ありげで灯もいつしか一緒に笑い出す。

竹林の木漏れ日が、視界の至る所で明るく踊っている。

この竹林を抜ければ、道は新興住宅地に抜け、灯の住む町へと続いていく。

風の術を使う、風のような人。

いつの間にか傍にいて、包み込んでくれる。

時にはそのペースに巻き込まれ、振り回されてしまうけど。だけど、それが嫌でない。

ずっと傍にいられたらと願う。

長い坂を、どこまでも、どこまでも風のように駆けていく。

二人一緒なら、どこまでも遠くに行けるような気がした。

（ 完 ）

17、どこまでも一緒に（完結）（後書き）

最後まで読んで下さって、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2186r/>

君が呼ぶ風

2011年4月23日17時51分発行